
隣界のユートピア-looking for the true justice-

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣界のユートピアーlooking for the true justiceー

【Nコード】

N0454X

【作者名】

暇人

【あらすじ】

世界が1つと誰が決めた。世界とは常に1枚の見えない壁で境界線を引かれているだけの物。勇者・魔王システムによって飛び込んだ新世界、少年たちが目にするのは正義か悪か！？ ※注意※この作品はフィクションです。実在する人物、団体とは一切関係ありません。

詩

空腹を満たすのなら果てしなく食べなさい。

樂をしたいなら何もしなくて構いません。

異性の身体が欲しいなら貪りなさい。

あらゆる物を欲するなら手に入れなさい。

他者を見下すのなら徹底的にやりなさい。

他者を羨み妬むのならどうぞお好きに。

他者が気に食わないのなら正直に憎みなさい。

それらは全て、世界の根幹で許されるでしょう。
なぜならその罪は、貴方が生きている証だからです。

罪を憎んではいけません。

真に憎むべきは弱き人の心。

罪の色が濃ければ濃いほど、生命の強靱さもその強さを増していくでしょう。

故に滅べ

愚かなる生命よ。

第1話：頂点を目指した男（前書き）

一次創作は今作が初作品です。

至らぬ点は沢山あるでしょうが、今できる範囲で精一杯頑張っていますのでどうぞよろしく。

設定、本文などで何かおかしい点がありましたら知らせてもらえる
と嬉しいです。

第1話：頂点を目指した男

20XX年初夏　日本　東京某所にて

照りつける太陽と茹だるような暑さの下で、呼吸さえ忘れるほどの緊張感があった。

トス

トス

トス

その静けさの中で、一定間隔で響く複数の音。

それはしなる弦から放たれた矢が、大気を裂き遠くに立つ的へ吸い込まれてゆく音だった。

的に中^あたる度に拍手が起こる。

ホッと胸を撫でおろし再び表情を引き締める者。

無念そうに項垂れその場から退場する者。

的前の中で観られる表情は選手の数だけ存在するが、ただ1人その中でも特に存在感を放っていた人物がいた。

この全日本弓道選手権大会……頂点を決める舞台で、彼ただ1人がなんの表情の変化も見せなかった。

まるで、”自分が頂点なのは当たり前”といわんばかりの態度で。

そして次の射の準備に入る。

今大会では”あたり”か”はずれ”のみを見る的中制のため、一瞬たりとも気を抜く事は許されない。

(的は60m先、直径1m……余裕過ぎるね)

だが彼の前ではこの状況は余裕過ぎた。

周囲の選手は汗を流し疲れを見せている中で彼は汗はかいているが疲れてはいなかったのだ。

むしろ集中し過ぎているのか的が良く見える。今なら本当に何度でも中てられる自信があると言っても良い、とその表情が物語っている。

矢を持ち、射のはじめの動作である”足踏み”に入ろうとした時だった。

「先輩、汗が指に伝ってるの気付いてない………!？」

彼を見ていた後輩の女子の内1人がそう呟いたが、集中していたのが悪かったのか彼は気付かない。

それどころか周囲は彼女の目の良さに驚くばかりで彼を見ようとは

していなかった。

そのままどんどん体勢は順を追って進んでいき、とうとう矢を放つ”離れ”の動作の直前”会”の動作まで進んでしまった。

だが声を出してはいけない。

それに、今さら教えてもどうにもならないのだから見届けるしかない諦めた彼女は手を組んで願った。

（神様、どうか先輩に微笑んで！！）

ヒュ

と音がした後トスと言う音が響き、会場がどよめく。
目を開け、恐る恐る結果を見ると

「先輩……………」

それまで自信に満ちていたはずの彼の、ガックリと項垂れて的前を後にする姿があった。



もうすぐ日が暮れる茜色の空の下、学生服に着替え直し会場を後にする学生5人がいた。

「木村先輩。その、なんていいますか……」

「ううん、君達が気にする事じゃないさ。これで勉強に集中できるようにするんだし暗い顔しないで」

「前向きだよね、マーサは」

「それにしても、先輩のレベルにおいても汗で滑るなんてミスはあったんですね」

「ごく稀に、さ。木村先輩みたいな夏場での汗によるずれの可能性はゼロじゃない。それでも基本的にはしっかり確認するし、指先に意識があるから気付くはずなんだ。先輩がそれを疎かにするはずもないんだけど……」

口ごもっていた少女は先ほどの彼の後輩で、胸のネームには竹内と言う苗字が刻まれていた。

落ち込む彼女に脱力した様子で微笑む木村と呼ばれた青年。

木村こと木村正義^{キムラマサユン}。彼こそ、先ほどまで圧倒的存在感を放っていた選手その人だった。

その後ろで彼をマーサと呼ぶ少し大柄な女子は植木、珍しいものを見たというような感想を言った彼は新庄、経験者らしき男はもちろん生徒で苗字は桐山^{きりやま}とあった。

「自分の身の周りの物に気配りを忘れた僕のミスが招いた結果だ。
1・2年の皆は明日からもしっかり練習しなよ？」

「わかってますってば、先輩。少なくともメンバー全員植ちゃん先輩よりは上手くなりますし」

「なにおう！？ ええ、ええ、どうせ私は高校はじめの不真面目部員でへたくそでしたよー！！」

「桐山、君の様子なら他のメンバーも安心してよさそうだね」

「俺達もいますよ先輩」

「わ、私も……頑張りましたゅー！！」

「竹内……囁んでる囁んでる」

正義はこのメンバーで弓道をするのが楽しかった。

先日終えた団体戦は他の日に既に個人戦を終えてしまった同学年達と共に挑んだのだが、健闘虚しく地区大会落ち。個人戦で全国まで登ったのは正義だけだったのだが、それも今日で終わってしまった。

「せっかくだからさ、マーサの全国出場記念に飯行こーよ」

「僕は奢らないよ？」

「えー、主将のくせにケチだなあ。じゃあ無しで」

「植ちゃん先輩……単純過ぎですよお」

なんだかんだで笑顔な一同。

顔は笑っていた正義だが、背中にまわしていた拳は血の気が無くなるほど強く握りしめられていた。

植木が言っていたように、正義は部内で一番の実力者だ。だからと言えど誤解が生まれるかもしれないが、主将……いわゆる部長の座にも就いていた。その主将が高校生活最後の試合に負けたのにのんきに後輩と食事する、と言うのが彼には理解できないでいた。

（負けたのに飯？ 学生なら部活を引退した後勉強すべきだろう？
クソッ、あんなみつともないミスで負けるなんてありえない）

自身への怒りでいっぱいのまま。



結局普通に電車を乗り継いで通学で使う最寄駅で植木達と別れ下車した正義は、弓道衣や弓を背負い直して駅を出る。

「正義先輩、疲れてるみたいですけど……弓をお持ちしましょうか？」

「ああ、大丈夫大丈夫。気にしなくても大丈夫だよ由紀」

駅で分かれたのは植木、新庄、桐山の3人。

正義と竹内は家こそ離れているものの駅や家の方向は同じなので下校や帰宅は一緒になる事が多い。

そのうえ2人だけの時は互いに名前で呼び合っていた。

一般的に見れば2人は付き合っているように見えるが、正義から見れば彼は竹内由紀と付き合っている、と言う意識は全く無い。

あくまで”親しい上下関係”と言うレベルだと思っている。由紀の気持ちを考えもせずに。

そんな彼の考えは由紀も薄々感じていた。

だからこそ正義のひとつ下、高校2年である自分は3年である正義との残り少ない時間で精一杯アピールしようと決めていた。

「先輩、私ちょっと寄りたい店があるんです」

「ん、そっか。じゃあまた明日学校でね」

そんな普通な会話を交わし「わかりました」などいううっかりで別れてしまうほど由紀は天然ではない。

「えっと、髪留めを……買おうかなあ、なんて」

「へえ。可愛いのに、見つかるの良いね」

苦し紛れに会話を続けようとするのだが、正義の笑顔が眩しく、こちらの考えに全く気付かない鈍感さに負けそうになる。

本当に呆れてしまうほど彼は鈍感だ。しかもたまにそう言った内容の話をすると、自分は女子から人気が無い、だのモテないだのと言いたい放題。

（うう、先輩のばか……………）

こういう時女の子はどうするべきなのか。

思いきって告白するべきなのか？ それとも張り倒して逃げるか？
さりげなく誘導させるべきなのか？

（ででで、でもでも……告白なんて出来たらずっと前にしてるし……先輩を殴るとか絶対出来ないし、誘導なんて器用な事できないよ
お）

なんとも可哀想な子である。

「ごめん、今日は疲れてるからこれ以上用が無いなら先に帰るね」

「あ……………」

そして、運が無い。



正義が竹内由紀と別れ、家が見えてきた所まで来た時だった。

「お、やっと帰って来たか。マサ！！」

「遅いよマサ。試合、どうだった？」

自宅の玄関先で2人の男女が声を掛けてきた。

「いや、僕のくだらないミスで優勝を逃したよ」

正義の言葉にう、とかける言葉を探し始める女の横で男はそれでも笑っていた。

「お前がミス？ 大事な所でミスするの昔から悪い癖だよな。気にしてもしょうがねえし勉強で巻き返せば大丈夫だって、な！！」

彼はオギツカセイジ小木塚誠司と言って正義の幼馴染。

中学まではずっと一緒だったが、高校で別れてしまった数少ない彼の親友。

基本的にポジティブで熱血漢。

馬鹿だが運動は出来る根っからのスポーツマンタイプ、かと思いきや意外と人並に勉強もできる人物だ。

「誠司……ホント前向きだよな。でもなんか気が楽になった。うん、僕にはまだ学力って武器があるもんね」

「さすがに全国模試1位の秀才でしかも弓道も日本覇者なんて美味しい話はなかったか。今日はマサの好きな物、マサのお母さんと一緒に作っておいたんだから食べてね！！」

少し脱力していた正義の背中をバシバシ叩く彼女はユウキカオリ悠木香織。

誠司と同じく幼馴染。彼女も中学までは同じで、高校は現在誠司と同じ所に通っている。

誠司ほどポジティブではないが、活発な性格で運動もそこそこ。学力は割と上位に位置している特にこれと言って特徴の無い人物。

しいて言えばその特徴は

(今日もおっきいなあ……………胸)

グラビアアイドルもびっくりなその胸だ。

(揉ませてとか言ったら殺されそうだな…………でもお尻ぐらいなら許してくれそうな気も……………)

しかし正義のその舐めまわすような視線に気付いたのか、香織は両腕で隠すように腕を組んだ。

「ちょっと、なにジロジロ見てるの。何言っただって触る事すら許さないからね？ ほら、疲れてるなら帰った帰った」

「香織は割とそう言う視線に敏感だよな。それに加えて地味にマサってムツツリだし」

「ムツツリって言うな！！ (変態という名の) 紳士って言え」

(それもどうかと思う)

ムツツリと言われ、とても真面目な顔で答えた正義の言葉に若干引き気味な2人だったが、その後すぐに試合後で疲れているだろうと気を使ったのか別れを告げて帰って行った。

ちなみに帰ったと言っても誠司は隣の家だし、香織なんて道路を挟んで向かいである。

だからこそ長く幼馴染として仲良くできているし、互いの事も良く知っているのだが。

(勉強しなきゃ)

気持ちを切り替えて大きく息を吐いた正義は玄関の扉を開ける。

「ただいま帰りました、母さん」

迎えてくれる母と、制服の首下を緩めながらすれ違い

「お疲れ様。お風呂いつでも入れるからゆっくり休んでね」

温かな言葉に頬を緩めつつ、本日犯した自らのミスを心の中で責め続けていた。

（僕とした事が、みっともない。クソッ、やっぱり僕が本気を出すにはこの世界は狭すぎる）

自室に入り、手から血が出るのも無視して壁を殴り続けていた。

その構えはまさに正拳突き。弓道ほどではないが空手も習得している彼は無手でも十分強い。

そんな彼の拳を受けて壁は少しずつきしみを上げていた。

その時だった。

— 汝、適性アリ —

ふと、どこからともなく低く生温いような男性と思わしき声が響いた。

ここは彼の自室だ。他の人間がいればすぐにわかるし、そもそも誰かが入り込むなど考えにくい。
もし入りこんでいたとしても隠れる場所なんて限られてくる。

（いやそれよりも、もし押し入れの下の段に侵入されたとしたらマズイ。非常にマズイ）

あそこは人に見られてはいけない物の宝庫だ。
もしアレを見られたらと思うと正義は大粒の汗を浮かべる。

（僕の趣味の90%があそこに収まってるんだぞ!?!）

誠司や香織にすらバレていない最重要機密だ。死守しなければ社会的抹殺を受けるかもしれない。

しかしそんな心配は不必要だった。

―ソノ身ノ内ニ秘メタ大イナル欲望、満タシタイトハ思ワナイカ?―

「誰だ。僕の部屋に無断で居座って訳の分からない事を言って、何が目的だ!?!」

―薄々気付イテイルノダロウ? コノ世界デハ心ガ満タサレナイ事―

「う……………」

―我ヲノ召喚ニ応エテハクレマイカ？ 相応ノ地位ヲ約束シヨウ―

「その言い方………お前の言う世界なら僕を満足させられるのか？」

―コノ世界ニウンザリシテイルノダロウ？ 汝ノ力ヲ全力デ振ルエルゾ？―

この時、試合での敗北や暑さによる疲れなどでぐったりしていたのが不幸だったのか。

特に必要もないのに、珍しく後先考えず決断をしてしまったのだ。

「なら導け。僕は本気で生きてみたいんだ」

―契約成立。歓迎シヨウ、我ヲノ王……魔王殿！！―

足元を紫を中心とした不気味な光りが包み込む。
そして徐々に足先からその空間へと沈んでゆく。

（あ、明日予約してたエロゲの発売だったの忘れてた。もったいな
い）

この世界で最後に考えたのは、己の趣味に関してだった。

第1話：頂点を目指した男（後書き）

弓道ってこんな感じでいいのだろうか。

私は弓道部などではなかったので全然違う、と言われると頭が痛い
です。

だれか……実際の様子を教えてください m (m

第2話：頂点にいる男（前書き）

今回はお待ちかね、2人目の主人公サイドです。

可能な範囲で1話での正義の性格紹介のカバーをしているつもりです。

より詳しく、具体的には今後の本編で少しずつ書いていければ、と思っています。

それでは第2話、どうぞ。

第2話：頂点にいる男

木村正義が高校生活最後の公式大会から帰って来た翌日。

いつものように起床した小木塚誠司オギツカセイジは何やらリビングが……いや、正確に言えば両親達が騒がしい事に気付く。

一度起床してしまった以上2度寝をするつもりが無い彼は、まだ目覚めきっていないまどろみの中で立ち上がり欠伸をしながら部屋を出る。

洗面所で顔を洗い歯を磨いて髪にワックスを付け仕上げた段階でようやく洗面所を出た。

その時間僅か10分。

「おはようございます。父さんも母さんもどうしたんですか？」

朝食の為キッチンの前に置いている机まで移動し挨拶をすると彼の母、美希が困ったような表情で彼を見ていた。

「ふぁ……おはによ………」

母の表情の意味がわからないままだった彼の背後から、可愛らしい欠伸と挨拶が響く。

振り向けば彼の後ろには、黒く脇の辺りまで伸びている髪を両サイドで細く束ねた髪型でピンク水玉のパジャマを着ていた少女がいた。

「おはよう、優菜ゆうな。お前の眠そうな顔は本当に可愛いな」

「ありがとう……おにいちゃん」

「顔洗って来いよ」

「ふあい……………」

彼女は小木塚 優菜。誠司の妹で、当然血は繋がっている。

朝に弱いらしく毎日しっかり目が覚めるまで時間がかかるのだ。

兄妹関係は良好で喧嘩もほとんど無く実に理想的な兄妹として近所では割と有名にもなっている。

誠司は優菜が洗面所へ行った事を確認すると妹の愛らしさに満足そうな溜息を吐く。

お察しの通り、彼は割と危ない領域に達したシスコンだ。

そして誠司は真面目な顔に戻って両親の前で姿勢を正した。

「何があったんですか」

「誠司、落ち着いて聞いてね」

問えば、母が戸惑いを隠せない様子で誠司を見つめ、彼女の代わり読んでいた新聞を机に置いた誠司の父が口を開く。

「聞いた話では昨晚の事らしい。木村さんのところの正義君についてだ」

「マサがどうかしたんですか？」

低く、淡々と響く声の主である父、堅三^{けんぞう}は唸る。

小木塚家において、両親に対して誠司が敬語なのは当たり前前の事だ

った。

堅三は息子のいつも通りな礼儀正しさに何も言わず言葉を続ける。

いや、全ての過程を省き結論を述べた。

「昨晚、正義君が失踪したらしい」

3人を沈黙が包む。

「え、待ってください……………本当に、マサが……………失踪？」

「彼の母から先ほど電話で美希が聞いたらしい」

心当たりは無いか、と問われたが誠司は答えられなかった。

突然の事に混乱して自分が今何を考えているのかさえ分からないほどだったのだ。

だが、行き先がわからない代わりに失踪した理由かもしれない事に
関しては少し予感があった。

彼は完璧主義だ。

勉強に関して言えば隙など存在せず、外出や自分の時間を削ってま
で部屋に籠り机に向かっていたような人物だ。

それに加えて学校にいる間は礼儀正しく、生徒の手本であり続け、
弓道部で日々文武両道を極めていたとも聞いている。

しかも彼は勝負事において極端なほど負けず嫌いでもあり、自らを

トランス状態に保つのが上手かった。
そんな正義がショックを受けるような事はあった。しかもそれは昨日の事らしい。

高校生活最後の公式大会で受けた、敗北の屈辱。

彼の性格からして十分理由になりうるのではないだろうか、と誠司は考えていた。

自分も剣道をしている。いや、同年代から見ればきっと自分は剣道を極めているのではないかと思われていても不思議じゃない。

誠司は公式大会で敗北を味わう事の悔しさと苦痛を知っているのだ。だからこそ昨日の敗北が正義にとって相当なダメージになったに違いないと結論付けた。

それを伝えようと口を開いたところで、どうも邪魔が入る。

「おにいちゃん、早く朝ごはん食べないと1時間目間に合わないよ？」

「――優菜っ!？」

背後から既にバッチリ目を覚ましていた優菜がいた。

さすがに父も母も、そして彼自身も妹である優菜に正義の失踪を”

今”は知らせるつもりはないらしく何事も無かったかのように朝食に戻っていた。

その時は、そこまでしか話す事が出来なかった。

.....

「いってきまーす!!」

「気を付けるのよ」

「……………俺も行きます。香織がたぶんいるし」

「ええ。誠司、気にするな……………なんて言わないけど、悩むのはほどほどにね」

「……………わかってます。今日は部内の引退試合だし、外部の人もあるから」

「そう、じゃあ頑張らないとね」

「はい」

誠司よりも一足先に玄関を出た優菜を追いかけるように誠司も玄関で靴を履く。

そして玄関の扉を開けて外へ出ると、やはり彼女がいた。

「おはよう、香織」

「……………うん」

そして当然の如く彼女の表情は暗かった。
恐らく自分と同じように親から正義の失踪を聞かされたのだろう、
と考えた誠司は彼女の肩を軽く叩く。

「あんまり暗い顔すんな。実は父さん達が優菜にまだ話してなくて
な……頼む」

「話してないの？ う………わかった、努力してみる」

決して励ますわけでは無く、ただ優菜がショックを受けぬよう細心の注意を払いたいだけ。
だが彼女は彼女で誠司が妹を溺愛している事は承知している上、自身も仲良くしているため彼に合意した。

「2人共早く！！ そろそろ本気でヤバいって！！」

「わかったわかった。そんなに足踏みしているとスカートがめくれるぞ」

「おにいちゃんになら見られても平気だもん」

「嬉しい事言ってくれるじゃないか、優菜ぁ♪」

「相変わらず変に仲が良すぎるわよね……」

実際、知らないからこそ発揮されている優菜の明るさに元気をもらっていた事も事実だった。

.....

「じゃねー」

「今日は先に帰ってくれ。俺は最後の部活だから遅くなる」

「ん、りょーかいですよー」

誠司達がいつものように学校に到着すると、1年生である優菜とは別れる。

その後、今日に限って誠司はすぐに香織と別れる事は無かった。

「どうしたの、誠司」

「香織、今日の放課後って予定あるか？」

「.....ない、よ」

未だにショックを受け入れきれずにいた香織は、彼女の1番の魅力である明るさを失っていた。

どんな時でも前向きに誠司と正義を励ましてきた彼女が、今は死んでしまったかのように濁った瞳を自分に向けている。

誠司はそんな彼女の姿を見ていられなかったのだ。

彼や正義がこれまでそれぞれの分野で努力を積み重ね続けられたのは、ずっと笑顔居続けてくれた、励まし続けてくれた香織のおかげだと両者とも自覚があった。

だから、これまで励まされてきた分、今こそ自分が彼女を励ます時なのだと信じていた。

そして今自分にできる事といえば、続けてきた努力の成果を見せる事だけ。

「今日の部活さ、高校最後の引退を兼ねた練習試合があるんだ」

「……………うん。それで？」

「その……………香織に、俺の最後の試合を見ていて欲しい」

そこで彼女は黙った。

断られる、そう思った誠司は答えを聞く前に教室へ行ってしまうかと体に力を入れた時だった。

「私だから……………意味があるの？」

別に嫌そうな顔はしていなかった。だが、明らかに戸惑いを見せていた。

それでもハッキリと拒絶が聞こえるより数倍マシだと誠司は感じる。

「ああ。1試合しか俺はしないけど……………もしその試合に俺が勝てたら、聞いて欲しい事がある」

だから意を決して彼女に自分の決意を示した。

彼女は当然驚きの表情を見せていたが、ほんのりと頬を染めて俯いた。

「なら……………勝ってね」

「お前が見てくれるなら、絶対勝つさ」

誠司は素直に嬉しかった。

香織が笑顔でいてくれるなら、自分に出来る事をしよう。

少なくとも自分の手が届く範囲にいる人達だけは笑顔でいられるよう、笑顔にできるよう努力しよう。

そう思っていたから。



そして放課後、校舎から少し離れた所にある剣道場では叫び声に似た気合に満ちた声が響いていた。

「ヤアアアアアアアッ!!!!!!」

竹刀と竹刀がぶつかり、今にもへし折れて吹き飛びそうな勢いで音を響かせる。

床を踏み鳴らす猛々しい足音と試合をする2人の熱気で道場の室温は高かった。

攻め、打ち込んで退き、前進しながらも胴へと竹刀を吸い込ませ打ち込んで通り過ぎる。

「オオオオオオオオッ！！！！！」

そして勝負は一瞬で決まった。

「うわっ!？」

片方が距離を詰め、小手を打ったかと思えば手が緩んだのを見逃さず追撃で持っていた竹刀を弾き飛ばしたのだ。

竹刀を手放し、なす術が無くなった青年は敗北を認めたのだった。

「そこまで!!！」

審判が試合を終了させ挨拶を済ませる。

勝利して防具を外したのは、やはり誠司だった。

「さすが主将です。圧倒的でしたね」

「宇佐美、俺のレベルなんて所詮日本の男子高校生の頂点だ。もつと上を見ろ」

「主将なら日本代表、狙えると思うんですけどねえ。次、いつてきます」

「ああ。お前は足を意識して動きに重みを持たせろ。それが課題だ」
真っ先に寄って来たのは、誠司の後を継ぐ副主将である2年の宇佐美。

彼もまた全国レベルではあるのだが誠司と試合をして勝った事が無い。

そんな彼は誠司のアドバイスに親指を立てて笑い応えた。

その後だった。

「誠司……お疲れ様。よかったらこれ、スポーツドリンク買ってきたよ」

「悪いな香織、助かるよ」

やはり今までのような元気は無いが、誠司から見れば今朝とは打って変わって笑顔が明るかった。

試合に勝った事を共に喜んでいるのかどうか、彼女の笑みの意味は分からないが、笑ってくれている事が素直に嬉しかった。

そんな想いを抱きつつ誠司は荷物を持って壁際に座っている部員達に一礼、コーチに一礼、顧問に一礼して最後に道場に一礼すると外へ出た。

不思議そうにその行動を見ていた香織に誠司は笑う。

「うちの部の伝統でな、引退試合を終えた3年は集合無しで道場から出るんだ。感謝の気持ちを込めながらしっかりと頭を下げて、潔く去っていく。俺、先輩達を見送ってた時は懂れたよ。後輩との慣れ合いも今日は無しだから帰ろうぜ」

「なんだかすごく誠司らしい風習だね。試合してた誠司、凄くカッコ良かったよ」

「お……………おう」

道場を出た後、素早く制服に着替え直した誠司は香織と共に校門をくぐる。

帰り道、電車の中では部活の思い出を話したりして2人で終始笑顔だった。



そんな2人の雰囲気が変わったのは、自宅の近所にある公園まで来てからだった。

「さて、そろそろ約束のあの話……するか」

「あ……うん」

人の少ない夕方の公園のブランコに腰かける2人。

キィキィ……………

ブランコが軋む音で、沈黙している間に無音になる事はなかったのが救いだっただ。

互いに視線を合わせる事無く、違う方向の遠くを見ている2人。

「俺さ、回りくどいの嫌いなんだ」

「知ってるよ。ずっと一緒に過ごしてきたんだもん」

そのままの状態で紡がれる言葉に、返ってくる言葉は確かにぬくもりがあった。

キィキィ……

「お前が本当はマサの事好きなんだって事も気付いてる」

「……………やっぱり」

キィ……

「それでも俺は、お前が好きだ。マサの代わりでもなんでもいい…
…俺が隣に居てもいいか？」

何も、返ってこない。

ブランコが軋む音も、求めている少女の声も、告白の答えも。

「こんな時に言うのは卑怯だってのも分かってる。けど……………!!」

「ありがとう」

「!!」

返ってきたのは、これまでに見た事が無いほど魅力的な笑顔と感謝の言葉。

彼女がどんな思いで感謝を述べたのかはわからない。

夕陽のおかげで彼女の顔が赤く染まっけていても彼は気付かない。

「誠司の私への気持ち……知ってた。私も誠司の事好きだよ。でも、それが恋なのかどうか分からないの」

「香織……」

「それに、私のマサへの想いさえ恋かどうかもわからないんだよ。どうかしてるよね」

「なら、これからは俺がお前を守る。どんな奴からも、運命からも」

彼は思わず立って香織の手をぎゅっと握っていた。

どんな形ででもいい、彼女と触れていたい。そう思ったから。

「……………はい。こんな私ですけど、よろしくお願いします」

彼の強い想いを感じ取った香織は、そう誠司に応えた。

そして世界は、平等に絶望を与える。

「――え」

足元が真っ白に輝き始めた。

「な、なに!？」

「香織、手を離すなよ!!」

良く見れば、光を放っているのは誠司の足元だけ。

すぐ傍にいる香織にはなんの影響も見られなかった。

公園に植えられている木々にも、先ほどまで座っていたブランコにもなんの変化も見られないのに。

「せ、誠司……足が!!」

「沈んでる!？」

香織の信じられない、と言いたげな表情から知らされる体の異常。指摘された誠司の体は、光の中へと徐々に足から沈んでゆく光景だった。

「嘘だよね? 私とずっと一緒にいてくれるって言ったよね!？」

もう誰かがいなくなるなんてやだよお!!」

「俺だってやっど……やっど香織に気持ち伝えられたのに、こんなのは嫌だ。でも……動かねえよ!!」

身近な人の事になると泣き虫になるのも、香織の特徴の1つだと誠司は知っている。

だから今彼女が涙してくれる事を嬉しく感じながらも、悲しませている罪悪感が胸を締め付ける。

「お前まで巻き込まれるぞ!？」

「いいよ!! この手を離すよりずっといい!!」

固く握られていた手が、すでに首まで沈んでいた体をかろうじて保っている。

だがこの逃れようの無い未知の力の前に、2人はあまりにも無力過ぎた。

” 通行は、1人のみとなっております ”

パシッ

と機械的な女性の声が響いたかと思えば、あれほど固く握られていた手が簡単に解けてしまった。

数刻前に温かな感情で繋がれたはずの2人が、まるで紙を破るのと

同様な流れで引き裂かれてしまう。

「誠司！？ やだ……やだやだやだ、 1人にしないでえ！！！」

状況の飲み込めないまま、最後の瞬間の香織の泣き顔を脳に焼き付けて誠司の視界がブラックアウトした。

第2話：頂点にいる男（後書き）

誠司は読んで分かりますが、真っ直ぐな少年です。

当たり前の事を当たり前に感じ、誰もが思うだろう事を思える。
そんな”当たり前”を持ちながらも偏った個性を持つのが彼です。

その偏った個性、と言うのはこれから書いていければと思っています。
す。

が、次話から少し正義側を書くつもりです。
その中で世界の紹介を兼ねながら物語を進めていきます。

それでは、次回のあとがきでまた皆様と会える事を祈りつつ。

第3話：弱肉強食（前書き）

今回からしばらく正義側を書いていきます。

今回は正義の様々な初めてが繰り広げられ、異世界への第一歩を！！

タグにR-15をつけてるから……セーフ、だよね！？

第3話：弱肉強食

砂を含んだ一陣の風が倒れていた彼の意識を呼び覚ます。

「うう……」

意識が覚醒することで一気に聞こえ始める盛大な歓声。
体を起こして辺りを見ると、信じられない光景が広がっていた。

「ここは……どこだ」

ステージを囲むように360°『なにか』がいる。
見た事の無い容姿、大きさの『なにか』が。

そして今、自分がそのステージの上で倒れていた事を再確認した正義はとりあえず立ち上がる。
改めて周囲を見ると、自分と同じくステージには他に4人の男がいた。

彼らは自分と同じ『人間』だ。

「なにがどうなったらこうなるんだろう？　こんな映像技術、世界にあったっけ？」

「ありませんよお。現実を見ましょうねえ」

呟いた問いに応える声があった。正義を含めた5人は一斉にその声がする方を見る。

それがステージの端、出入り口らしき穴の奥から出てきた幼女から

発せられた物だと言う事を彼らは知る。

だが、やはりそれは人ではない『なにか』だった。

「これよりい、スカイル恒例行事を行いますう」

一気に沸く会場。

語尾が妙に伸びる眠そうな口調でマイクラしき物を握りしめて喋る彼女は、司会進行者の様子。

良く見れば彼女、身長は日本で言う小学6年生辺りだが異様に胸が大きい。

それに妙に頬が朱に染まり正義を見る瞳が熱を帯びていて外見とは不相応な色気を振りまいていた。

（そういえば、明らかに人間には見えない存在ばかりだというのに僕に言葉が通じる……いや、意味が分かるんだだろうか）

「ちなみにい、異世界の5人には言語統一補助の術式を展開してますので、問題無く言葉を理解出来ますよお」

正義が先ほどから微かに疑問に思っていた事をタイミングを合わせたかのように説明してくる。

すると2人の男性が次々と前へ出た。

「おい、なんだここは！？ テメエ俺らになにさせたいんだよ！？」

「そうだそうだ！！ 私は”魔王”云々と言われて突然こんな事になってるんだぞ！？」

その2人の言葉で正義もようやく意識を失う前のやりとりを思い出した。

だが、1つ気になるフレーズがあの時あった事も同時に思い出す。

―契約成立。歓迎シヨウ、我ラノ王……魔王殿！！―

あの声はそう言った。正義に向けて確かに”魔王”と言ったのだ。

だが今の男性2人の話を聞いているとどうやら他の人は”魔王”と言うワードが会話に登場はしたが本人がそう呼ばれていた、と言う事ではないらしい。

すると、自分だけがそう呼ばれたのだろうか。と疑問はさらに深みを増してゆく。

しかし状況はそれ以上の思考を許してはくれなかった。

「これからこの5名で殺し合いをしてもらいますう。最後の1人になるまで戦ってもらい、残った人が今代の魔王に就任と言う事でえ」

（……待て、最後の1人になるまで殺し合えだって！？）

「人を無視すんなよ、おい！！」

いまいち現実味を帯びていない話に戸惑っていた正義を余所に、先ほど司会の幼女に説明を求めていた男性は無視された事に腹を立てたのか彼女に迫ろうとしていた。

だがそれが全て間違いだと言う事を他の4人は思い知らされることになる。

「気安く近寄るな、汚らしい肉塊が」

「——え」

ステージに居た残りの4人が言葉を失い、突然広がった光景を黙って受け入れるしかなかった。

「う——ぬううううううう!!!!」

前傾姿勢で迫っていたはずの男性があおむけで倒れ、碎けてしまうのではないかと思うほどの力で奥歯をすり合わせ必死で声を上げるのを堪えていた。
彼が抑えている足を良く見れば、両足共に膝から下が宙を舞っていた。

「な、なんで!? 誰も何もしてないよね!?!」

「し、知るかよ!! おいガキ、どうなってんだ?」

「ち、ちち、血!? お、お医者様は!?!」

「本気で殺し合いをするつもりなのかよ……」

正義の狼狽に続けて、3人の男性が血の気が引いた顔で司会の幼女から離れてゆく。

しかしその中でも正義だけは彼女から離れよう、などとは思わなかった。

むしろ不気味に頬を吊り上げて、倒れている男性の頭を踏み潰している彼女から離れればそれだけでも殺されると直感したのだ。

「ここらあ、どこにも行けないんですからちゃんと殺し合ってくださいねえ」

呆れた様子で彼女が指を鳴らすと、今度は踏まれていた男性だった物が発火した。

その肉塊はピクリとも動く事無く吐きそうになる生臭さを撒き散らしながら炭へと変化してゆく。

（どういう仕組みなんだろう……これが夢だったら僕本気で厨二病だよ!?!）

「夢じゃありませんよ。さて、残りの3人は動くようです。生き残ってもらわないと困りますよ?」

読心術まで使えるのか顔に出ていたのかどうかははっきりしないが、彼女は正義にだけ小さく声をかけた。

そしてクスリと笑って少し距離を置くと、彼女の言う通り残りの3人が正義に迫っていた。

「な、なんですか!?!」

「1人になれば生きられるんだろ!?!」

「悪いな少年。俺は死にたくないんだよ」

「だからまずはお前が死んでくれ、J A P」

人間の生存本能に従ったのだろうか、生物の本能は恐ろしい、などとこんな状況でも正義は冷静に感想を抱けていた。

そんな事を思える時点で、彼もすでに精神をだいぶ擦り減らしているのかもしれない。

結局、生物の生存本能がぶつかると言う事はすなわち

「弱肉強食……か」

正義は初めて向けられる本気の殺意に負け、押し倒され首を絞められていた。

（息が、できない……）

視界が霞み、自身の首を絞めている人物の顔がよく見えない。

徐々に暗くなってゆく視界の中で、今度は眼球が1回転したのではないかと錯覚してしまうような気持ちの悪さを得た。

次に見えたのは赤い霧のような光景だ。その先にうっすらと先ほどの男が見える。

（ああ、死ぬのか。でも人を殺すぐらいなら死んだ方が絶対にいいよね……）

人殺しはいけない事だ、許されはしない。

だが正義の思考はそこで終わりはしなかった。

（でも、なぜ人が人を殺してはいけないんだ？ どうして人を殺してはいけないのに動物は合法なんだ？）

そんな事は考えるまでも無く生きるため。
生きるために他の動物を殺して食らい、自らの血と肉としているのが人間だ。

それはいわば弱肉強食。

（弱い生き物は強い種によって捕食される。僕は……………弱いのか？）

それとは別に、思考のどこかで”人を殺してはいけない”と叫んでいる自分がある事も彼自身理解していた。

だが、彼はまだ死にたくなかった。

だから、”殺人”と言う行為に正当性が欲しかった。

なぜなら、人を殺してもなお自分は綺麗でありたかったから。

なぜなら、彼の名は”正義”だったから。

（強き者が、弱者を殺すのは……………当たり前のことだ！！）

よって彼は本能を…………いや、本性をさらけ出した。

「ゴフッ!？」

苦しさも痛みも自らの肉体の状況も度外視して、彼はまず首を絞めていた正面の男性の喉仏を拳で粉碎する。

突然の反撃になんの反応も出来なかった男性は、血を撒き散らして背中を地面に付ける。

「こ、この野郎!!」

突然の状況に驚いていたが、落ち着きを取り戻した男性の内1人は拳を振り上げて正義に駆け寄る。

その様子を見た彼は、一度残っているもう1人がまだ腰を抜かしている事を確認すると右拳を作る。

「それは三流の台詞だろう？ R P Gで言うチュートリアルに使われる敵ぐらいの残念さだ」

迫ってきた男性の右腕を左腕で弾き足元へ払い、そのまま左足を軸に体を回転させ男性の右頬を右手の裏拳で殴り飛ばす。

その後通過させた右腕を構え直して、体勢を崩した男性の顔面に拳を入れて鼻をへし折った。

痛みに悶絶しているのを確認した正義は追撃でさらに頭部を蹴り飛ばし終わらせた。

「ひ、ひいいいい!!? 人殺し!!」

「お前に言われたくないな。先に僕を殺そうとしたお前に」

「なんでそんなに強いんだよ!? もしかして最初から司会のガキとグルだったのか!!」

「見苦しいぞ、生への執着に身を焦がすグズ。僕をJ A Pと罵ったぐらいだから賢いと思っていたんだが」

残っていた最後の1人は金髪で唇にピアスを通していた白人男性。言葉遣いや服装からアメリカ国籍の人物だろうと思ったが、正義の興味はそこまでだった。

いい加減声を聞くのも嫌だったのか真っ先に左足で頭部を蹴りつけて1度黙らせる。

その際に勢いが強かったからか、金髪男性の歯が何本か折れて飛んでいった。

「マ、ママ……死にたくねえよお!!」

「存在自体が間違っている。単細胞からやり直して再び死ね」

執拗に頭を蹴り、殴り続ける。

男性は最後の方は笑いだしおかしくなっていたが彼は気にしなかった。

いや、仮に気にしたとしてそれをきっかけに今の感覚が消えてしまう可能性がある事を恐れたのだ。

結果として最後まで立っていたのは正義と、傍観していた少女だけ。観客のボルテージは最高潮に達していた。

「うっふふのふふ♪お疲れさまでしたあ」

「……………」

「ちなみに私に挑むのは勝手ですけど即死にますよ?」

「……………これで、満足?」

「それはもう！！ 会場みなさん、祝いましょう……今代の魔王、木村正義様ですう！！」

鼓膜が破れんばかりの拍手と大歓声が、正義の全てを祝福した。

高ぶっている感情の中で、正義は狂ってしまいそうになるほど強烈な欲求に身悶える。

喉の渴きを潤したい、と思うのと同じような感覚で殺したい、という欲が湧いて出てくる。

（ああ、やってしまった……）

それと同時に死んでしまいたくなるほどの重く苦しい後悔が押し寄せる。

今だけは、自分の両手を見るのが怖かった。

（これで僕はもう、以前の僕には………戻れない）



その日の夜。

正義はあの決闘場（“フェムト”と呼ばれているのを後から聞いた）からその国の宮殿らしき建物の一室へとあの少女に案内された。

その部屋は広く、日本の東京都内なら億ションレベルの高級感が漂っている。

赤い絨毯を敷き詰め、眩しいほどの白で埋め尽くされた壁と天井、窓際には大きなベッド。

（このベッド、明らかにダブルベッドサイズ……だよな）

サイズは大きい。とにかく大きくて綺麗に保たれていた。

「さあ、遠慮しないで。とりあえず今夜はここが貴方の部屋だから」

「あの、さっきみたいな口調は……」

「ん？ ああ、あれね。せっかく幼女体型なんだから、公の場ではムードメーカーでいたいだよ」

サバサバした口調の少女はどこからどうみても先ほどの司会の幼女。相変わらず背が小さい割には溢れんばかりのボリュームを持つ胸は健在だ。

「今日はとりあえずやる事も無いし休むと良いわ。初めてだったんでしょう？」

「えっと……なにが？」

「人を殺すのが」

「……」

彼女は窓の前に立ち、胸を押し上げるように腕を組んで小さく笑う。良く見れば彼女の背中には2枚1対の漆黒の翼が生えており、尾てい骨付近からは黒い尻尾が確認できる。

「あの……君は人間じゃないよね？」

「ええ。私は”サキュバス”に分類される魔族よ。名前はナイン」

「ナインさんは、ある？ 人を殺した事」

「呼び捨てでお願い。それとほぼ間違いなくこの国では他人を殺した事が無いヤツの方が少ないわね」

正義は急に昼間のことを思い出して吐き気が込み上げていた。

目の前で人を切り裂き、焼き払ったサキュバスを自称するナイン。そして生きるために人を素手で殺した自分。

昨日まではなんの変哲もない学生だった自分が、たった数時間であまりにも多くの死に触れてしまった。

「眠れないの？」

「そりゃ……あんなことがあった日に眠れる方が凄いいんじゃないかな」

すると顎に手を当てて何か呟いた後、ナインは正義の両肩に手を置いてそのままベッドへと押し倒した。

突然の事に思わず顔を真っ赤に染める正義だが体は動いてくれない。

「な、なななに……かな!？」

「貴方は生き残った。既に貴方は”魔王”になっているのよ」

「全然実感なんてないけどね」

「そして魔王の”民は魔王の所有物”と言う特権は発動している。そして民は魔王に尽くす義務がある」

ふう、と耳に息をかけられ思わずのけ反った彼はナインの甘酸っぱい香りを感じた。

目の前で山吹色の短髪が揺れ、どこまでも深く広がる蒼い瞳と目が合いそらせない。

脳の奥が痺れるような感覚の中で、彼は自らの下半身が熱を溜めていることに気付いた。

「なるほどね……貴方の罪魂^{スベリア}は3つか。それと、身体は正直ね」

「な……っ、やめ——むぐっ」

甘い匂いのする吐息で、完全に身体のコントロールが利かなくなっただ正義のことなど気にしないナイン。

彼女は艶のある桃色の唇を、何が起きているのか思考が追いつけていない正義の唇に押し付けるように重ねた。

「じゅる……ちゅ……んちゅ………ちゅ!？」

「んふう、ちゅ、ちゅ………ちゅ……んふう!!」

初めてなのに、などとはじめは思っていた正義も2度目、3度目にはすでに相手の唇を貪ること以外考えられなくなった。

息が続く限り唇を重ね、相手の口に唾液を送り込むことだけを考える。

呼吸を整えるため唇を離すと、銀色のようにみえる唾液の糸が2人を1つに繋いでいた。

（なんで全く体がいうことをきかないんだろう……）

正常な思考の一部でそんな疑問を抱きながらも、今唇を重ねているナインのことを考える。

見た目は小学6年生のような大きさだが胸の大きさをはじめ、外見に不相応な雰囲気強烈なギャップを感じる。

（この状況を第3者が見たら……僕、確実に犯罪者！？）

だが止めるつもりはない。

「ん……ちゅ、んふ……ちゅ」

「んはぁ……ちゅ……ちゅ、んちゅ」

体がコントロールできないのなら諦めて流れに身を任せるしかない。正義はナインの背中に腕を回して抱き寄せ、激しさを増してゆく彼女との唾液の交換に集中する事にした。

「んふ、ちゅ……うふふ、飢えてるね……君」

「あいにく、女の子に恵まれた事が無くてね」

いつの間にかナインは全てを脱ぎ捨てていた。

「体の力を抜いて。私と……しょ？」

ナインの囁きによって、正義の精神はすでに逆らうという選択肢を

捨てていた。

それと同時に”理性”と言う枷も外れていたのだが。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「なるほど、では今日の召喚の儀で魔王の座についたのはその少年なのだな？」

「はい。明日には正式な発表が出来るかと思われませんが、全てナインの管轄ですので」

「どこでもいいさ。俺はダリイからゲイグ公爵やアイーシャにお任せだ」

宮殿の最も高い位置にある玉座の間にて、3人が言葉を交わしていた。

1人は固い鱗におおわれた皮膚に大きく逞しい褐色の翼、龍の頭部で軽装の甲冑を見に付けている。

その男に報告していたらしい小柄な女性は、立派な騎士服に身を包んで腰には剣を挿していた。

そんな2人にへらへらと笑いながら手を振る漆黒のスーツの男は一目でわかる優男。

「では吾輩からファミユールに新たな魔王殿の教育係を依頼しておく。アイーシャとアラド男爵はもう休むと良い」

「そのような雑用であれば私がお引き受けいたします、ゲイグ卿」

「カッカッカ、気遣いは無用だ。気持ちだけありがたく受け取っておこう」

「……かしこまりました」

アイーシャと呼ばれた女性騎士は深く頭を下げるときびきびとした動きで去っていった。

残ったのは、ゲイグと呼ばれたリザードマン龍人とアラドと呼ばれた男。

「アイーシャは真面目すぎるな」

「それがあいつの取り得でしょーよ」

「否定はせん。が、あの子はまだ若いというのに己を殺し過ぎておる。吾輩ではどうしようもない」

「俺も同じッスよ。ま、ダリいから結局なにもしないんすけどね」

青年も去った。

残されたゲイグは、ガラス越しに見える綺麗な月を見上げその両翼を広げる。

「おお、まだ見ぬ新たな我らが王よ。どうか我々に……この戦いに打つ終止符をお与えくだされ!!」

低く響く龍人の咆哮は夜の深い闇へと消えていった。

第3話：弱肉強食（後書き）

色々と過激な描写があって不安です。

ノクターンは嫌なのでもしも「アウトだろ」と思う箇所がありましたらご指摘お願いします。

今後も今回程度……場合によってはさらにきわどい表現を使う場面があるはずですので、その時の基準にしたいです。

※エロ・グロ問わず。

まあ大丈夫だとは思いますが。

それでは、今回はこの辺りで失礼します。

また次回お会いできることを祈りつつ。

第4話：“日常”にサヨナラを

陽が沈み月が闇を照らし、月が消え陽が光をよこすのは元の世界もこの世界は同じだった。

昨日、幸か不幸かこの国の王……すなわち魔王となった木村正義は慣れないベッドで目が覚めた。

「ん……………朝か」

清々しいとまでは言わないが、それなりに深く眠れ気持ちよく目が覚めた。

以前よりだいぶ体が軽い、と言う点を除けば恐らく自分の体調は問題無いのだろう。

いつもの癖で、とりあえずベッドから出ようと手をベッドに置いた。

むにゅ

柔らかく温かい感触が右手に宿る。

「むにゅ……………」

「ん…………やあん、君って…………グーインだね」

僕の横に女の子が眠っている。

とびつきり可愛いが小柄な容姿とは不釣り合いな色気を振りまく真正銘の女だ。

人間じゃないけど。

「って……うあああああああ!？」

そして僕の手が彼女の胸を鷺掴みにしていた事を理解した瞬間、頭の中が真っ白になる。

無我夢中で空中を泳ぎ逃げるかのようにベッドから離れた。

あんまりにも驚いて思わず叫んじゃったけど……誰も来ない、よね？

「うわ、しかも僕裸だし……そうだ服、僕の服は!？」

「燃やしちゃったよ？」

「なんですと!？　って、起きてたの!？」

アタフタしていた僕に、眠っていたはずの少女ナインが爽やかな笑顔で教えてくれた。

いや、厳しい現実を突きつけた。

「なんで燃やすの!？　しかも君まで裸!？」

「なんとなく燃やしたかったの。それとエッチしたんだからお互い裸なのは普通でしょ」

「ブ——ッ!!」

「それとも正義の世界では着衣状態なの？　新発見だわ」

「いや、ほとんどの人は脱ぐよ!？ 時と場合と性癖によるけど…
…って僕は何を言ってるんだ!?!」

「地味にムツツリだね」

「ナインにまでムツツリって言われたあ……」

楽しそうに僕と言葉を交わして微笑むナイン。

だが彼女はサキュバスと呼ばれる種族の生き物であり、僕のような人間ではない、と言っていた。

でも確かサキュバスってキリスト教の下位悪魔だったような……まあいいや。

「ゴホン。で、結局僕は何を着ればいいのさ？」

「さあ？ そろそろ来るから彼女に任せましょ」

「え、ちょ、誰か来るの!?!」

「大丈夫大丈夫。正義みたいなチェリーなんて気にしない人だから」

さつきからナインの言葉が胸に突き刺さってる気がするんだが、それよりもなによりも服を着たい。

いや、とりあえず下半身だけでも隠したい。恥ずかしいし、ナインも裸だから……その……

「あ、また大きくなってる」

「言うなっ!?!」

「盛大に放出するくせに回復も早いんだね……ますますこの世界に向いてるよ、君」

「この世界に向いてるって……ねえ、そろそろ情報が欲しい——」

サラッと流しそうになったナインの言葉に僕が質問しようとした時。コンコン、と部屋の扉が叩かれた。昨日は色々としょくで気付かなかったがこの部屋の家具やら扉はいちいち大きい。

不思議に思いつつも、僕は全裸のまま来客を迎える羽目になった。



「はい、これで魔王様のお着替えは終了よ」

「……………ありがとうございます」

「へえ、馬子にも衣装ってやつ？」

「褒めてないよね、それ」

「ふふ、まあまだこれから先もっと大きく逞しくなるわよ、きっと」

「下を見ながらニヤニヤ顔で言うのやめましょうね!？」

結局ノックして扉を開けた彼女によって、僕は用意されていた衣類を着させられた。

自分で出来るって言ったのに……いや、実際に服を見たら全然着方がわからなかったんだけど。

18にもなって女の人に着替えをさせられるのは割と屈辱的だね、男として。

で、着替えを終えた僕は慣れない感覚にそわそわしながらも目の前の女性を改めて見た。

（メロン……いや、スイカ!？）

凄く……大きいです。

え、何が大きいのかだって？

わかってるんですよ。いちいち言わせないでよ恥ずかしい。

「改めて紹介するけど、この人はファミユール・エトナさん。メデューサとデビルの混血で超美人」

「よろしくね。ゲイグ卿から新しい魔王である貴方のお世話係を任されたファミユールよ」

「混血だのなんとか卿だのと……怪しい感じするけどよろしく願います」

僕はもう色々と諦めました。

今の状況とかサキュバスとか混血とか、信じられないことばかりだけど信じなきゃいけない。

現実として僕が巻き込まれているんだから、拒絶し続けていても意味が無いしその先は破滅だと思うから。

そして、たった今紹介された見た事無い美人なこの人は見た目は凄く人間に近い。

青く長いストレートな髪を前髪を抑えるようにして、茶色いカチューシャを装備。

その上にアホ毛がみょーん、と伸びていてこちらを見つめる大きな瞳は茜色……かな。

よく見ると髪からはみだして見える耳が尖っているからいわゆるエルフに近いのだろうか。

いや、デビルとメデューサの混血だからエルフに例えるのは間違いかもしれない。

いよいよ僕の人生がRPG化してきてる……

「時間に余裕がありません。歩きながらでよろしければ簡単にはありますが、色々とご説明いたしますよ?」

「ナインは?」

「私は別行動。自分の仕事もあるしね」

ファミユールに背中を押され、遂にこの部屋を出る。

廊下を少し歩いて最初の突き当たりでナインは僕達とは別の方向へ歩いていた。

「君との夜、とっても気持ち良かったよ♪　じゃ、またねえ」

「ば、バカ!」

そんな台詞と甘い吐息を僕に残して彼女は去っていった。

いや、そもそも幼女顔でそんなアブナイ発言をされたらどう対応すればいいのか分からなくなる。

もしかして僕ってロリコンだったのか!?

いや、違う。

違うに決まってる!!

僕は自分の正常さを信じてるんだ。

結局、それ以上の思考はファミユールさんによって遮られるんだけれども。

「あらあら、まさか召喚初日に食べられたんですか？」

「うう……」

彼女は顔色一つ変えずに、赤面して小さくなりつつあった僕に微笑んでいた。

というよりもまず、ナインが男を”食べる”行為に対してはノーリアクションですかファミユールさん。

「まあ食べられて良かったと思うわよ」

「どうしてです？」

すると彼女はまた別の、温かな優しい笑顔で僕を見る。

「ここ最近勝利した事のある魔王はね、どうもみんなナインが手を出した人らしいのよ」

「…………それは、いわゆるジnkスのものですか」

「分かりやすく捉えればね。ただしちゃんとした理由もあるわ」

言葉を交わしながらも長い長い廊下を歩き、同じような景色の廊下を彼女は迷いもせずにスイスイと曲がってゆく。

「でもその理由の前に、まずはこの世界について大雑把にだけ知ってもらおうかしら」

歩きながら彼女は这个世界について説明を始めてくれた。

「この世界を私達は”スカイル”と呼んでいるわ。そしてスカイルには私達のような”人ならざる者”である魔族と、魔王様と同じ人間が存在して、巨大な山脈を境にそれぞれの国家を形成して生活を作ってる。両国は、常に戦争状態で激しく争い優劣を決する”戦争期間”を設けてるわ」

「わざわざ戦争をする機会を設けているんですか？ それに、魔族が自分達の王、魔王を敵である人間から選んで召喚する理由がわからないです」

「そういう詳しい質疑応答は後で受けるから、今は黙って聞いて覚えて欲しいの」

「ああ、この後の展開が読めましたよ。わかりました、続けてください」

僕が思うに、これから”魔王”の側近を紹介するのだろう。

これはそのための移動であり、チュートリアル的なものなんだろうなあ。

勇者視点のRPGってメジャーだけど魔王視点ってそこまでポピュラーじゃないし展開が読みにくい。

でも仮にこの世界をゲームだと見立てると、はじめは世界観の説明があって然るべきだよな。

そう思いながらも僕は説明を再開していたファミユールさんの話に耳を傾け直した。

「この世界の一番の特徴は2種の対立ではなく、あらゆる生命体が扱えると言われている”罪魂”^{スピリア}と呼ばれる能力よ」

「罪魂……ですか」^{スピリア}

「スピリアはその生命体が一定の条件を満たしていると、それに見合った属性を発現するの。現在に至っても研究は難航してるし、秘められた力は限界を知らないって言われてる」

「では、この世界ではその力を使つての戦闘が主になってくるんですよね？」

すると彼女は首を横に振って少し早足になった。

彼女が言うには、スピリアとは生命体の精神力を削って力に変える過程を持つ能力の総称らしい。

要するにMPを消費して技や魔法を使うのと同じ理屈だと思う。

「スピリアを扱える者は決して多くないの。むしろ使い物になる人

材だけをカウントすればその数は人間、魔族共に3割にも満たないでしょう。けれど、兵として人数を集められれば大きな戦力になり得る。術者とは、才能に左右される点が多いのかもしれないわね」

「さつきスピリアには属性がある、みたいな事を言っただけど何種類ぐらいあるの？」

「現在確認されてるのが7種類よ。それ以上はここ数百年確認されてないわね」

待って、数百年って言ったよね……今。

この人はそれを、まるで自分が生きて確認しているような言い方をしたよ？

と言うことは――

「魔王様、私達魔族の寿命を人間と同じだと思わないでね？　ちなみに私の事”年寄り”とか思ってたら死ぬより辛い思いをさせてあげるわよ？」

「け、結構です……続けてください」

危ない危ない。

さすがにメデューサの血が混ざってるだけあって目力が凄いです、ファミュールさん。

その後、スピリアに関してだけは詳しく教わった。

どうやらその属性と言う奴は割とメジャーな物らしい。

焰、水、雷撃、風、氷結、鋼、大地の7種類。

それぞれの属性が発現する条件というところまではまだ研究が進ん

でないらしい。

7種類で生物の精神に関する能力か……意外と七つの大罪みたいなのが関係してたりして。

……そんなわけないか。仮にそうだとしたら発現する確率が低い点に納得がいかない。

誰しもが持つ罪だからこそ七つの大罪なんだから、発現しない＝罪が無いということになる。

人生において罪を生まない生き物なんて存在しないんだから。

人間なんて、最悪”存在”自体が罪に等しいんだし。

一種の妥協を以ってようやく人間は大地に足を付け生きているのだ。生まれながらにして持つ罪は、他者に影響を及ぼさない限りは断罪を免れている。

そうでなければ僕だって今こうして生きてなんかいないし、生まれてすらいないだろう。

結局のところ、スピリア云々の専門的な研究は学者に任せておけばいい。

『スピリアを使用できる』という事実さえあれば学者でない者にとっては十分なんだから。

そんな事に思考を巡らせていると、いつの間にか足は止まっていて目の前には大きな扉があった。

「着いたわよ。この宮殿の中央、玉座の間で貴方の側近となる人達を紹介して、詳しい説明を始めるわ」

「やっぱり扉とか大きいなあ」

「ふふ、なにせ巨漢がいるからね」

「やっぱり……」

心なしか彼女の声は弾んでいた。

よほどこれから顔を合わせる人物達と仲が良いのだろう。

その分僕は色々イメージが偏って緊張が増してるんだけど。

「さあ、自分で開けてみて。貴方の新しい生活への扉を」

「腹を括るしか……ないよね」

諦めて僕は扉を押して開いていく。

低く響く扉が、軋む音が緊張で高鳴っている僕の心音をかき消した。

この時、ようやく僕の日常は完全に碎け散った。

第4話："日常"にサヨナラを（後書き）

色々なサイトで小説の書き方などを見ていると、自分の書き方や物語の展開の仕方が間違っているように思えます。

修正はしたいのですが、仮に修正するにしてもそれをするには作品を一からやり直さないといけないので諦めました。

そのかわり、出だしてミスをしても徐々に挽回していけるよう頑張りますので、応援よろしくお願いします。

次回は正義側の主要メンバーが登場する予定です。

では。

第5話…威厳あつての忠誠

扉を開けた先で正義を待っていたのは、煌びやかと形容するにふさわしい彩りかつ派手な造りの大広間だった。

壁際には床に敷き詰められた白いタイルから縦に高く伸びる大きな窓があり、等間隔で外界からの光を室内へと誘う。

広間の最奥、あらゆる方向からの光を反射させその存在感を撒き散らす座。

そしてそのさらに奥の頭上には、これまでの知識では理解しえないようなカタチをしたモノが描かれたステンドグラスがあった。

そんな広間に並べられた机、椅子には突き刺さるような視線を正義に向けてくる人物達が腰を下ろしている。

人間に近い見た目をしたモノがいれば、明らかに別の生物を連想させる図体を持つモノもいる。

そしてその中には、やはりと言うべきかナインがいた。

「ゲイグ卿、魔王様をお連れいたしました」

「うむ。このような些細な事まで頼んでしまつて悪かったな」

正義が彼女と完全に視線を合わせるよりも先に、ファミユールがゲイグ卿と呼んだ人外に膝をついた。

”卿”と言う敬称を扱うと言うことは典型的な貴族制だな、と感じた正義は少し悩んだ。

”魔王”とは言葉通りの意味であれば当然国の頂点に君臨する王の

はず。

そしてこのスカイルと呼ばれている世界での王は、過去の英国のような王が行う”絶対王政”と同じかもしれない。それに近いシステムで国を運営しているに違いない。

ならば真っ先に行わなければならないことは、主権を国民へと移す民主化と身分差別などの意識改革、加えて財政や現在のこの国の軍備まで全てを知る事。

（無理だ……一介の高校生が、そこまでの激務をこなせるはずがない）

そう考えるのが自然であり、彼がまだまだ元の世界の価値観を基準に生きている証。

だが、そんな考え方が長く続くはずがなかった。

「少年」

「は、はい」

気がつけば正義の正面には、彼に大きな影を落とす巨漢が立っていた。

豪勢かつ重く高圧的な雰囲気を見せる服装に身を包んでいる彼は明らかに人間ではなかった。

そんな人物に相対して何を言えば良いのだろうか、と考えていると目の前の『なにか』は笑った。

「はっはっは、そう緊張しなくても良いですよ。どんな胆が据わっていた過去の魔王達も皆吾輩を初めて見た時は同じような反応でしたからなあ」

「し、失礼しました。えーっと……」

「吾輩はこの”ガルフラム”の軍師を務めているオルケス・ドウ・ゲイグと申す。爵位は公爵を授かっており、軍事国家に近いこの国の尺度で考えれば魔王と言う地位の次に来る位置に身を置いております。以後、お見知り置きを」

「あ、だからゲイグ卿ですか。よろしく願います」

すると、正義の態度があまりにも下からの姿勢だったのか、今度は逆にオルケスが困った顔をする。

そして正義の背中を軽く数回叩くと、広間のさらに奥へと彼を誘った。

その先には横1列に並んで立っている先ほどの異形達。

「随分と控えめな態度の魔王殿ではあるが、吾輩はこの者を認めよう。皆はどうか」

「少なくとも5人の中で生き残ったのです。私共はの総意としては是、であります」

オルケスの問いに、代表者らしき女性が1歩前へ出て正義に対し頭を垂れた。

すると彼は満足そうに頷き、一度大きく手を叩く。

「時間が惜しい。早速だが自己紹介といこう。吾輩は見ての通り、龍と大蛇の混血である魔族ですぞ。龍の血が濃いかからかあまり大蛇の方は知られてはおらん。今後は魔王殿を支える立場になる」

豪快に笑う彼は、確かに皮膚が褐色の硬い鱗のような物で覆われており、背中には巨大な翼と蛇の腹を連想させる逞しい尾が伸びていた。体の大きさは2mを軽く超えているだろう。

彼のそんな愉快そうな声を聞きながらも正義は苦笑し、短時間で得る膨大な情報を必死で処理していた。

だが、正義のそんな苦勞を知るはずも無く、オルケスはどんどん目の前に並ぶ一同を紹介していく。

「左から順に紹介していこう。先ほど魔王殿に頭を下げたあの娘はアイーシャ・ダウナ。我が軍の中でも特に優秀な騎士だ。デビルの純血ではあるが良い子だぞ」

正義がアイーシャと呼ばれた彼女と視線を合わせると、彼女は綺麗な姿勢で頭を下げた。

褐色の肌に緑色の長い髪をポニーテールに束ねていて、こちらを見る眼差しは鋭い。

ゆったりとしたドレスに近い服装をしているが、その上にそのまま防具を装着する事を想定しているのか既に帯剣していた。

オルケスとは違い、彼と比べるととても小柄で純粋な高さだけで言えば彼の胸辺りまでしか身長が無い。

「次にあのヘラヘラした男。奴はニユード・ヴィ・アラド男爵。アイーシャが騎士の筆頭ならば、彼奴はスピリアの代名詞とも言える。欠点としては自主性に欠ける点か。そう言えば魔王殿はスピリアに關しての知識をお持ちで？」

「ここに来るまでにファミユールさんに基礎知識は教わりました」

「よろしい。まあスピリアの扱いに関しては奴を頼ると良い」

「うい、よろしくな」

アイーシャの次に前に出たのは黒スーツの男性。

緋色の肌に尖った耳、胴体と比較すると四肢が長く小顔。

茶の瞳の瞳孔は猫のように細く髪はボサボサなくせに腰の辺りまで伸びていた。

見た目の印象を一言でまとめれば”冴えない優男”だろう、と正義は密かに思っていた。

「後の2人はまとめて紹介しよう。彼女はケイティ・ド・ケーニヒ騎士。デーモンの純血で由緒正しいケーニヒ家の長女。剣の腕もさることながら、スピリアの扱いも一流の王宮が誇る騎士の1人ですぞ。そしてその隣のアレはグラード・ヴァン・ゴルゾー侯爵で、デーモンと鳥人の混血。戦斧による豪快な技とスピリアの運用がケイティに負けず劣らずだ。ちなみにアイーシャよりも強いことは周知の事実であると言う事も覚えておくといよいぞ」

「ケイティですわ。私の家系は代々魔王様にお仕えしている故、私も同じようにお傍でお仕え出来る事を光栄に思っております」

「いやあ、一度の紹介でこの人数は辛かろう。済まないが覚えてくれたまえよ、魔王殿。オルケス君の紹介の通り、グラードと申します。期待しているよ」

アイーシャとはまた違い、人間に近いと言う点では同じケイティだが彼女は肌が白かった。

長く艶のある黒髪を白いリボンを使って先端で結わえており、尻からはナインと似たような尻尾が正義には確認できた。

瞳は赤く、身長は正義と同じか少し高いぐらいで全体としてもバランスの良いスタイルをしている。

その隣、グラードはオルケスに少し届かないながらも2mはあるだろう体をしていた。

ただ、紹介通りデーモン呼ばれる種だからか、人型をしており鳥人の血もあるため背中にはオルケスとはまた違う”鳥”と形容するにふさわしい綺麗な白い翼を持っていた。

体毛が濃いからか素肌までは確認できないが、恐らく白い。

クリーム色の髪は短いが細く1本に束ねた部分だけはスツと背筋に伸びていて、瞳は翠色。

口はというと、くちばしだった。黄色のソレは鷲のような形をしていて、目つきも鋭い。

よく見れば指の爪も鳥のように鋭く、頑丈そうな体をより強く見せる事を可能にしていた。

口調は丁寧で態度も紳士的。正義が第一印象で好感を持てたのは彼だけだった。

「まあ残りは知っているだろう。ナインとファミール。ナインの立場はあやふやだがこれでも立派な我らの同胞。ファミールはこの宮殿のメイドの1人……とでも思ってくれ。主に救護班の班長なども担っている」

「早く覚えるように頑張り……ます」

無理な話だ。

が、そんな事よりも正義はこの世界に関する情報がもっと欲しかった。

だから一同が近くにあった椅子に適当に腰を下ろした後、オルケスに少し……いや、かなり遠慮がちに尋ねた。

「そう脅えられるとこちらも少し堪えるんだが……まあいい。時間に余裕がありません、答えるのは基本的にファミユールになるだろうが、知りたい事は今の内に聞いておいてくれ」

「はい。ではまず、このガルフラム国の政治体制や軍、世論などをお願いします」

するとやはりファミユールが前に出た。

「ええ。このガルフラムは予想していたでしょうが魔王様を頂点に置いた、王制を取り入れてるわ。でも『魔王不在』という期間が必ずあるわけで、その間国のトップの代行をするのが、現在ゲイグ卿が務めておられる『特別王制補佐』と呼ばれる役職。一応民の代表が集まって話し合う議会も取り入れてはいるのだけれど、そこでの話し合いはこれまで王の行政の参考程度にしかなくていいのよ」

「つまり、王制の中にも議会は存在するけれどその重要性は極めて低い……と」

「そうなるわね。次に軍についてだけれど、ガルフラム軍は大きく分けて3つの部隊に分かれてる。貴方と最も縁があるのは強襲部隊である騎士1〜3番隊とスピリアを扱う魂撃隊こんげきたいだと思うわ。前者は1番隊が最も大規模で中央をアイーシャ、右翼をケイティ、左翼をグラードが指揮する形を取ってる」

「で、魂撃隊はそもそも人数が少ないからアラド男爵が率いている感じですか」

正義の予想にファミュールは満足そうに頷きニユードを見る。
彼は少し不愉快げに鼻を鳴らして正義達から目を背けて足を組んでいた。

「軍に関してはまた必要になれば教えるわ。そしてたぶん貴方が一番気になっていた世論。この国は王制であることから必然的に貴族制なのだけれど、平民扱いの一般魔族は”人間根絶”を叫んでるわ」

「人間側との戦争をする理由はなんですか？」

「ごめんなさい、それは私にもわからないの。両国が戦う理由なんてほぼ誰も知らないんじゃないかしら。気がついたら歴史の中に勇者・魔王システムが存在していたのだから」

正義は顎に手を当てて唸る。

戦争が起きる理由さえ分かれば戦争回避も夢ではない、と考えていたのだがやはり駄目だった。

ゲームとは違って今自分がいるのは現実だ。そう簡単になんでも物事が進むなんて楽な話はなかった。

（しかしまあ世論が対人に傾いてるのに、魔族を統べるのが人間って皮肉だよな）

するとオルケスが腰を上げた。

「では魔王殿。とりあえず質問は以上かな」

「はい、大丈夫です」

「では魔王殿にも自己紹介をしてもらいたい。さすがに吾輩たちも自らを統べる者が何者なのかを知らないのは抵抗があるのでな」

彼の言いたいことはわかる。

普通に考えて、これから親密になるであろう従者たちに自分を紹介しない主は少ないだろうし。

別に聞かれて困ることはこの世界では無いだろうから趣味以外は話すでしょうか。

と素直に正義は判断した。立ち上がりそこに集っている皆の前に立つ。

ある程度緊張感はあるものの、なぜか居心地の悪さなどは感じられなかった。

「僕は召喚の声に応じてこの世界に來た木村正義です。18歳 فقطと学問や武術に関しては同年代の人間の中では割と自信があります。まだまだ分からないことばかりですけど、よろしくお願いします」

一言でササッとまとめた後、深く頭を下げる。

日本人としては当然の挨拶なのだが、王制ならではというか当然ながらそれを見た一同がギョっとした。

「あ、頭をお上げください陛下!!」

「そうですわ。王たる者、そうひよいひよいと頭を下げてはなりません!!」

反応したのやはり騎士だからかアイーシャとケイティ。

2人が顔を青くしながらあわてて正義に頭を上げさせる。

その様子を見ていたオルケスは再び豪快に笑った。

「魔王殿、今のような態度では民はお主を支持すまい」

「それは、わかっているつもりです。王に必要な”威厳”が今の僕には無いんですから」

「わかっておるのなら話は早い。すぐに成長しろ、とは言わん。演技でも構わぬからまずは口調と一人称を変えてみてはどうだろうか」

「やっぱり改めるべき点はそこですよね」

正義自身、王になる人物が自分の事を”僕”などと呼ぶのには気が引けていた。

それに妙な腰の低さも自覚があったからか、オルケスの提案を彼はすんなり受け入れることができた。

咳払いして一度俯く。

再び顔を上げた時、『少年』だった木村正義は消え、『王』へと昇華した木村正義がそこにあった。

「では、これより私は自らを王に相応しい人格へと高めていく努力をすることを宣言する」

一人称を私に変え、穏やかだった目尻を吊り上げる。
ちようにど着ていた派手な衣装が、この為であると知った彼は優雅に

マントを翻して低い声で宣言した。

簡単な事だったのだ。

ただ高圧的になるのではなく、周囲を説き伏せることができるような覚悟を曝^{さら}け出せばいい。

その中でも日本人としての心を忘れることなく、謙る考え方を織り交ぜていく。

「ゲイグ卿をはじめ、お前達にはしばらく迷惑をかけるだろうが：
：改めてよろしく頼むぞ」

正義の纏う雰囲気が一変したのにつられてか、場の空気までもが変わった。

一瞬にして緊張感が満ち、正義を見ると無意識のうちに姿勢を正してしまう。

彼があまりにも堂々と立っていることもあったが、態度の悪かったアラド男爵でさえ驚きのあまり締まりのない表情を浮かべていた。

「ハッハッハ、やればできるではないか。正直驚きましたぞ。それでこそ吾輩が尽くすに値する魔王の姿！！」

満足そうに深く息を吐いたオルケスは正義の前で膝をつき首を垂れる。

「このオルケス、”陛下”に付き従うことを誓いましょう」

「当然だ、そうでなくては困るさ」

オルケスと正義

2人にはこのやり取りで十分だった。

そしてオルケスが正義を呼ぶ際に魔王殿から陛下へと変えたことを、正義は素直に認められた証と受け取る。

正義が覚悟を持った事を確認したファミユールは優雅に頭を下げてテラスへと彼を導く。

「陛下、民が待っております。初の仕事である魔王の宣誓をお願い申し上げます」

「私の考えと方針を言えいいのか？」

「御意にございます」

魔王として国を動かしてゆく決意をした彼には、その返答で十分だった。

少し頬を上げて笑みを浮かべると、両手はこれまでに経験した事が無いほど震えていた。

（ははは……これが、僕の望んだ本気で生きられる世界か！！）

あまりの感動に思わず叫びそうになったが耐え、いざ一步出そうとした時だった。

「新人魔王殿に1つアドバイスでもしよーか。スピリアは使用者の内に巢食う罪の意識が現象として扱われるんだ」

「何が言いたい、アラド男爵」

「もしお前さんに何かしらの適性があって、それを使いたいと思っ
たら思い浮かべな。自分という人格の持つであろう罪を」

「……………覚えておく」

アイーシャが彼の失礼な態度に腹を立てているのが見え、なんとなく正義は可笑しく感じた。

それと同時に、このタイミングでスピリアについてのアドバイスを
受けた理由、アラドの狙いを考える。

（セオリー通りなら、ここで新たな王に逆らう愚者が出る…………その
防衛策、か？）

だが、結局のところ正義が下す判断はブレなかった。

（誰がなんと言おうと、僕は僕の正義を推し通す。逆らう者がいる
のなら何度でも説き伏せてやる）

今度こそ本当に彼は頂点に立った。

元の世界、弓道の世界では立てなかった頂点に代わり、誘われた異
世界で彼は頂点に立ったことを誇る。

そして大きな窓を通過し、王宮の外を初めてその目に映した。
眼下に広がっていたのは、大地を埋め尽くすほど押し寄せていたこ
の国の民。

オルケス達を見て分かるように、様々な種族、形をした民たち。

彼らは正義の姿を目撃した途端、押されて倒れそうになるほどの迫力を持つ大歓声を上げた。

拍手や聞き取れないほどの絶叫が正義の精神をどんどん高揚させていく。

一方で室内、部屋の最奥で正義の背中を眺めるナインは、腕を組み歯をむき出しにして笑っている。

その横では彼女と言葉を交わしていると思われる侍女が数名いた。

そんな事に対して誰も気にかけないまま状況は進んでゆく。

異世界スカイルのガルフラム国。

その王宮の謁見の間の窓、その外側の足場から、魔族を統べる魔王となった、木村正義は両手を広げる。

「民よ、その目に焼き付けろ。今代の魔王の椅子は私、木村正義が継承した」

はじめの一言はさらにもう一息続く。

「私に付き従え。さすれば私が皆を導くべく遣わされた世界の覇者である事を証明してみせよう!!」

第5話：威厳あつての忠誠（後書き）

1週間空きました。

理由は聞かないでください、大したことじゃないので。

さて、今回は色々とキャラクター達が登場しましたがまだ序の口。
ちなみに今作は女性少な目ですのでご注意を。

萌え↓×

燃え↓○

をモットーに頑張ります。

次回は正義の最初の魅せ場。

順調に進めばすぐに誠司側へと移れると思います。

第6話：自覚した罪

歴代の王、初の演説の舞台でこれほどまで強烈な歓声が上がったことは無い、とナインは思った。

「毎度毎度思うのだけれど、貴女の目に狂いは無いのね」

「当然でしょ。それが私の仕事だし唯一の楽しみみたいなもんだから」

彼が元いた世界の人間の中から、一定期間をかけて次の魔王にふさわしい器を探しだす。

それが、”ナイン”と言う名前を持つ彼女の使命だった。

彼女の磨き抜かれた選定のセンスを今さら疑うつもりなどさらさらない、とでも言いたげにファミユールは腕を組んでナインの横に立ち、大歓声を受けている正義の背中を眺めていた。

「彼はこれまでの王の中でも特に歪んだ内面を持ってるように見える。それも含めて彼を選んだの？」

問われたナインは肯定の意志表示のためしっかりと頷く。

「じゃあはじめにフェムトで他の人間と殺し合いをさせた理由は何かしら」

「簡単よ。あの時の正義には王である器はあったけれど王となる資格が無かった。だから生きる者の抱く最大の欲、”生”への執着心を強制的に増幅させたかった」

「結果は？」

「想像以上。彼は生存欲以上に支配欲や自らの持つ”正義”への理想を爆発させてくれた」

もう、ナインは笑うしかなかった。

可笑しくてたまらない。

魔王選定で選んだ人物が自ら進んで王にふさわしい人格に成長した事。

彼の内面に巢食う歪な価値観の増幅。そしてどこまでも純粹で揺るがない信念。

「ふふふ、これならばらく安心して仕事が出来そうだわ」

「別に貴女が独りで何をしているのかまでは問わないけれど……ほどこどになさいよ？」

呆れたように呟くファミユールの言葉など耳も貸さず、ナインは隣にいた侍女らに意識を向けた。

「セブンはエイトの所へ。向こうの現状を聞いてきなさい。ツーはいつも通りに」

セブン、ツーと呼ばれた2人の侍女はすぐにその場から姿を消す。彼女らは正義の世界で言うメイド服を纏っていたが、背丈、体格、顔までナインそっくりだった。異なっていたのは髪と瞳の色形。

ドッペルゲンガーのようで気味が悪い、と思いながらもファミユールは正義に意識を戻した。



「聞け、民よ。私は無用な争いを望まない。無用な血など求めはない」

正義が言葉を紡ぎ始めると、徐々に眼下の異形達は静けさを広げていた。

彼の演劇のように大げさな言い回し、その迫力が彼らを押しつぶしていたのかもしれない。

「人間が憎い者よ、争いを憎む者よ、よく聞け。私は憎しみと言う感情を否定はしない」

どよめきは彼の後方からだった。

え、と思わず声を漏らしたアイーシャ。

ふむ、と顎に手を当てたグラード。

フン、と鼻を鳴らしたオルケス。

「憎みなければいくらでもその胸に憎しみを抱けば良い。だが、それは苦しい事だ。そして何の意味も無い」

今度は下に集まっていた群衆かがざわついた。

「復讐など意味が無いのだ。憎しみを武器に戦う事などには一切の誇り、意義など存在しえない!!」

そんな周囲のざわめきなど気にもせず正義は言い切った。

この一言には、背後で聞いていたケイティやニユードまでもが唸る。

「私の下に兵として集う意思のある者達よ、己が胸の内に問え。お前達の胸に、誇れるだけの意志はあるか!? 憎しみに囚われ、仇討として人間を敵視するような思想は捨てているか!? 共有できる”正義”の志の灯は燃え盛っているか!?!」

先ほどもペコペコと控えめに頭を下げていた人物とは思えない、とオルケスは感じた。

そしてこの勇猛な姿こそ、彼が望みしかし叶えられていなかった本当の姿ではないだろうかとも思う。

(18の少年に、吾輩がここまで震えるとは……さすがに、ナインに選ばれるだけのことはある)

身体が疼くのを、彼は喜びと言うより大きな感動で打ち消した。

そして、次の正義の一言にその演説を聞いた全ての民達は激昂した。

「故に私は宣言しよう。私は自ら望んでは兵を進めはしないと。そしてこれは命令だ。人間に対し攻撃することを一切禁ずる」

再び大地が揺れた。

それは、正義を見た直後の歓喜とはまるで違う怒りを含んだ絶叫だった。

数えきれないほどの人数が一斉に怒鳴っているためその声を聴きとれはしないが、何を言っているかの予想はついている。

だからこそ、このような輩が出てくるであろう事も計算し演出の一部とした。

「オイ、さっきから聞いてりゃふざけんなよお前！！俺はテメエが魔王なんて認めねえ！！」

目の前にはさっそく反発したであろう飛行能力のある者の群衆が隊列を成していた。

正義1人に対し、その数は空を飛ぶ鳥のように数えきれない。

「ならば、どうすればお前達は私を認める？」

「決まったらあ……魔王なんだろう？ それなりの”力” ってもんを見せてもらおうじゃねーか！！」

言った。

確かに聞いた。

”力”を見せろ、と。

正義はこの世界に來た直後に男性らを殺めた時に似た感覚を抱いていた。

（所詮僕の行いも野蛮な恐怖政治……か。わかっている、これが一番手っ取り早い）

彼は可笑し過ぎて吹き出しそうになるのを必死で堪えながら顔を引き締めた。

後方では正義を守るべくグラードとケイティが控えるがニユードとオルケスが2人を制する。

それでいい、と無言の感謝を2人に述べつつ演説前のニユードの言葉を思い出していた。

（スピリアとは、己の内にある罪の意識が現象として扱われる）

正義に異を唱える群衆へと、彼は右手をかざす。

（僕の罪は……はは、決まってるじゃないか）

自らの有能さ、非凡さを武器に周囲の人間を踏み越え続けた。

弱い者達と並んで歩くのが苦痛で仕方なかった。

だから必要以上に学校と言う檻にはいないようにした。

周囲の人間の不出来さに、数年前は殺意が湧いていた。

”僕は周りと違って優秀な人間である”

そんな優越感を持ちながらも、善人を演じ続けていた。

だから正義の周りには常に人間がいた。

だが、そんな窮屈な生活はすでに終わっている。

（そうだ、僕はいつだって他者を見下し続けてきたじゃないか）

よって導き出される罪は

「私の第1の罪、それはまさしく”傲慢”だ!!」

先ほど正義に”力”を見せろ、と罵声を浴びせた異形の青年を悲鳴をあげさせる暇も無く焼き払った。

一瞬にして全身を炎に包んで力無く落下していく肉塊。

「どうした、まだ私を認めないか。ならば貴様ら全員焼き払ってやろうか？」

狂ったように声を引きつらせながら、笑みに頬を釣り上げる正義。そんな彼を見て本能的に危機を感じ取ったのか徐々に後退していく一同。

だが、たかが1人焼却したところで彼が満足するはずもなかった。

「ぎゃあああああああ!？」

また1人、なんの前触れも無く悪魔を連想させる漆黒の翼を持った

異形が発火した。

それに加えて体のあちこちが痙攣し、眼球がひっくり返るような勢いで体をのけ反り泡を吹いて落下する。

「案ずることなどない、私は今後お前達の王であるよう努める。逆らうのならいつでも挑んで来い。私はいつでもその挑戦に応え、ねじ伏せてやろう」

今度は、完全な沈黙が訪れた。

「それに、話は最後まで聞くべきだ。人間を攻撃してはならないと言う命令には例外を設ける」

再び正義は笑う。

「『防衛のためならば、手段を選ばず排除して構わない』という例外だ」

再び一同は湧く。

「賛同する者は兵に志願せよ。それ相応の報酬を用意させる」

後ろからげ、と言うナインの嫌そうな声が聞こえたが彼は無視。

1度大きく手を叩き、そのまま腕を広げた。

「私は王として『人間との適当な共存を保ちながらも、人間もまとめて支配し新たな世界の秩序を創造し平和を築く』事を皆に約束しよう」

異形達は一度”共存”と言う言葉に反応したが、”支配”と言う言

葉によってそれはかき消される。

その後ははじめと同じ規模で大気が震えた。

「私の築く平和のために、皆の正義と力を貸してもらいたい。私を王と認めるならば、私を讃えよ!!」

正義への支持は、やはり揺るがない物となった。



「全くの別人みたいだったね。それでも、君自身が歩みたい道を決めたことを私は支持するよ」

「グラード、先ほどケイティと共に私に助太刀しようと勇んでくれた事、感謝している」

演説を終えて、窓から室内へ戻った正義をグラードは爽やかに迎え入れた。

そんな彼を正義は本当に紳士的だと思い、表情こそ崩しはしないが柔らかな声色で感謝を述べる。

「よくもまあこの世界の説明を受けたばかりであそこまでペラペラと……」

「ナイン、お前が私を召喚するのに儀式をした場所へ案内してくれ」

圧倒的なまでの演説を見せつけられたナインが呆れたようにあーあ、と息を吐くと、正義がナインの腰に手を回した。

この世界に来て2日目だというのに、急に変化していく正義の態度に不信感を募らせつつナインは彼を見直す。

「せ、積極的だね……もしかして演説の内容ってあらかじめ考えて――」

「私は”頼んで”いるんだ。いちいち些細なことで私に”命令”させるな、ナイン」

正義の表情は凍っていた。

先ほどグラードに向けたような年相応の顔ではなく、ただ無表情に彼女を見下ろしている。

さすがに周囲も正義の様子に気が付いたのか息を詰まらせた。

「それともなんだ。私には見せたくない、知ってほしくないことでもあるのか」

「それは……」

上目遣いで正義を見るナインの目はなぜ疑うのか、という疑問に満ちていた。

それを敏感に感じ取った彼は、周囲に気取られぬようナインの耳元でささやいた。

「お前と瓜二つな侍女達に何を命じた？ お前の行う仕事の内容はなんだ？」

「!?!」

バレていないなどと思ったのか、とでも言いたげに鼻を鳴らす正義に彼女はもう従うしかなかった。

「わかりました……陛下」

2人で玉座の間から出るため扉へと向かう途中、思い出したかのように正義は振り返った。

「ファミユール、私の今後のスケジュールを後で報告。オルケス、兵の志願者への対応をアイーシャ、ケイティと共に頼む。グラードは現在軍に在籍している兵達を集め私の方針の通達を。それとニューード」

一息にまとめて指示を出した正義は最後にニューードの名を呼んで一度息を吸う。

「助言、助かった。後で私からお前の所へ顔を出しに行くから自室で待機していてくれ」

「おーおー、早速いっちょまえに指示するねえ。了解だぜ、魔王殿」

「アラド男爵……君はいつもながら口が悪いね」

「グラードの旦那、言いつつも俺に直させるつもりゼロツスよね」

ニタニタと笑っていた2人と、正義からの初の命を受け姿勢を正し頭を垂れていた残りのメンバー。

彼らが命令を受諾したことを確認すると、正義は今度こそナインと

共にその場を後にした。



「他の皆はここにある通路やこの先にある部屋について知っているのか？」

「知らないよ。ここの存在どころか普段の私の単独行動の内容だつて知らないと思う」

カツカツと足音を響かせながら、天井が低く幅が狭い地下へと向かう階段を下りている2人。

正義の質問にサラリと答えるナインの台詞から、彼女の行動制限に関する特権に疑問を抱いた。

なぜ、彼女だけが承諾も報告も無視して単独行動が許されているのか。

なぜ、彼女だけが知るような通路がこの宮殿の中に存在しているのか。

なぜ、その事に関して誰も疑問に思わないのか。

「この階段の入り口……宮殿の中庭にある、噴水手前の見つけにくいからくり床だったな。お前が作ったのか」

「うん。この建物の中で唯一私のプライベートが確保できる場所だもん。そりゃ隠すでしょ」

「この先には何がある」

「研究室、とでも言えばいいのかしら。それと私と2人の時ぐらい素の君のままでもいいんじゃない？」

今度は正義が黙った。

しばし考えた後、彼はナインの言葉に従い方の力を抜いた。

「駄目だ、どうも僕はああいいう堅苦しいのが長く続かない」

「無理やり自分を演じてると、いつか限界が来る。上手な偽装には常に高度な技術と忍耐力が必須よ」

そんな話を話していると、扉によって階段が終わっていた。その扉を開いた先には、ろうそくで明るく照らされた広い空間が現れる。

壁際に押し込まれた本棚や食器棚、無数の数式のようなものが描かれた紙が散乱している机と椅子。

割れたフラスコ、焦げて炭になっている何か。床に転がっているロボロの書籍。

そして何よりも目を奪われたのは部屋の中央だった。

「なんだ、これ……」

込み上げてくる嘔吐感を、口元を抑える事で我慢する。

「君は何を調べてるんだ……」

部屋の中央の床には、まだ新しい真っ赤な血液で描かれた不気味な魔方阵が広がっていた。

横には使われた血液の持ち主だったであろうおびただしい数の動物の死骸が、山のように積まれている。

一度それを見てしまえば、あとはもう充満する鉄の臭いと生臭い腐敗した肉の臭いしか感じない。

「見てわかるでしょ。私はスピリアを使った新しい戦闘技術と召喚技術の研究をしているの。そのためにあらゆる書物を保管して知識を蓄えて、私なりにアレンジしていく。血でわざわざ円陣を描くなんて初の試みだからドキドキしてるわ」

「なんとも、思わないの？」

するとナインは不思議そうに首をかしげた。

「何が？」

「何が……って、こんなにたくさんの生き物を殺して使うなんておかしいでしょ！！」

するとナインは吹き出して大笑いし始めた。

何がおかしいのか、と怒りを覚えた正義は歯軋りして拳を握る。

「あっはっは！！ だったら人間はもっと酷いでしょ。動物を殺してその上食べちゃうんだし」

「う……」

「ちなみに、魔王召喚の儀式にも生贄が必要だったんだよ？　どれぐらいだと思う？」

ナインの楽しげな笑い声で響いた、召喚に関する事実には彼の表情はさらに強張った。

握っていた拳の力が抜け、今生きている自分の身体を見る。

「1000……魔王召喚にはそれだけのデビルの生贄が必要なんだよ」

「嘘だ……」

少しずつ震えだした正義に、ナインはさらに真実を突き付けていく。まるで、彼の胸に1本ずつ剣を突き刺して殺していくかのように。

それだけの数の生贄をどうやって集めるのかなんて想像もしたくない、と思ってもナインは容赦しない。

「男女子供問わず、とりあえずガバっと1000集めるんだよ。もちろん抵抗されるけど私に勝てる奴とかいないから、手足を切り落として動けなくするとかいろいろ工夫はしたなあ」

「なんで……」

「でも次の戦争に勝てるならたった1000体ぐらいどうってことないよね。実際戦争が始まればその何倍何十倍って数が死ぬんだし。それに比べれば微々たるもんだよ」

「なんで……」

「笑っちゃうよね、生まれてから死ぬまでなんの役割も持てずに雑魚のまま死ぬなんてさ!!」

「なんでお前はそんなに楽しげに喋れるんだ、ナイン!!」

我慢の限界だった。

自分がこちらの世界に来るきっかけだったあの現象には、それだけの犠牲があったこと。

そんな事を知りもせず、当たり前のように魔王として振る舞い演説までした己の滑稽さ。

そして、多くの命を容赦なく奪い取った本人が犠牲者を中傷し笑っている。

彼はその全てに我慢ならなかった。

彼女の胸元を掴み足のつかない高さで壁へと押し付けて首を絞める。

「え、なになに? 今ので怒ったの?」

「ふざけるなよ。頼んでも無いのに召喚して、しかも生贄まで使ったのか!？」

「私は超真面目だよ。君を狙ってわざわざ召喚の儀式を始めたんだ。しかも契約したのは君の意志のはず」

「くっ——」

「それと、私はセックス以外で男に攻められるのが……最高に腹が立つわけよ」

「ブッ——！？」

首を絞めていたはずなのに、彼女が指を鳴らした途端正義が吹き飛んだ。

反対側の壁に背中を強打した彼はぐったりと床に倒れ込む。

「この際だから力量の差をハッキリさせましょうか？ 死にたくないなら私に踏み込むな。私に触れるな。私に牙を剥くな」

「あ、ぐ……」

倒れていた正義の腹部にさらに激痛が奔る。

それは、ナインの爪先が彼の腹を何度も何度も蹴りつけていたことによる痛みだった。

「今後どうするかは正義の自由よ。とりあえず言っておくけど、元の世界には戻れない。”魔王”としての貴方には一応従いはするけれど、ただの正義には従うつもりはないわ。それだけは頭に置いておいてちょうだい」

「無用な詮索はするな……か」

「そうよ。たとえば君が魔王でも知らなくていいことはいくらでもある。残念ね、RPGみたいに上手く物語を進行できなくて」

「な——！！？　どうしてナインが僕の世界の文化を！？」

今度は頭部に激しい揺れを感じた。
数秒後に頭を蹴られたのだと理解する。

「踏み込むな、って言ったばかりでしょ？　消えて。あとここでのことをほかの連中にバラしても殺すから」

正義はガクガクと震える膝を何とか使ってその場から立ち去るしかなかった。

それ以外に選択肢などない。

玉座の間でナインを追求するという選択肢が間違っていたのか、と後悔が思考を埋め尽くした。

その後、階段を上り外に出た辺りで彼の意識は闇へと消えた。

第6話：自覚した罪 (後書き)

やっと一番最初の正義の魅せ場が終わりました。

それと同時にいろいろと発覚するものもありましたが。

次回の7話でとりあえず正義側を終わらせるとしています。

8話以降は誠司が中心になってくるかと思っていますのでよろしく願います。

では、次回もお会いできることを祈りつつ。

第7話…小さき探究者たち

「どうしてですか、先輩……」

弓道場の片隅で、膝を抱えてうずくまる少女の呟きはもう1週間近く続いていた。

周囲の人間も、彼女ほどではないが動揺していたがようやく落ち着きを取り戻し始めていた。

そんな中彼女だけが。

竹内由紀だけがどうしても立ち直る事ができずにいた。

「竹内がああだと、どうも部の雰囲気盛りがらないな」

「しょうがないと思う。だってあのマーサが、うちの学校の代名詞になりつつあった超優等生が謎の失踪だよ？」

「しかも竹内さんは木村先輩に特別な思い入れもあったみたいだね」

少々困った様子で、うずくまって動かない竹内を見ていた桐山は弓道場を見渡す。

正義が失踪してもう3日ほど経ったが、部員達の動揺はあからさまで活動に出る人数も減った。

単純に3年が引退し気が抜けた、と言う点もあるのかもしれないが、それを考慮しても多かった。

引退しているはずの3年生の植木は、以前と変わらず『遊びに来た』と称して毎回の部活に参加している。

彼女は彼女でそれなりに部が心配で、ヘラヘラしながらも下級生の様子をキツチリ見ていた。

沈黙が続けば自ら話題を提供しなるべく会話を続けられるよう努め、いつも以上に騒ぐ。

部員達も彼女のその不器用な気配りに当然気付き、言葉にはしないがありがたく思っていた。

そして、竹内が落ち込んでいる理由に心当たりがあるような言い方を
する新庄もまた困り果てていた。

この学校の弓道部は実力を持っていたのが正義だけ、というわけではない。むしろ部全体として見てもとても優秀な部なのだ。

当然部員1人1人も植木のような部員を除いて優秀な記録を数多く持っている。

竹内はその中でも『次期エース』の冠を狙えるだけの実力を、地味ながらも持っている数少ない部員だ。

だからこそ、彼女の欠落は部としては大きなダメージになる可能性があり、彼の頭を悩ませる。

「とりあえず練習させちゃう？」

「いえ、今は何を言っても意味が無いですよ。気持ちの整理がつくかどうかは竹内自身の問題ですから」

「俺も桐山に賛成ですね。同じ女子として頼りたいっていうのもあるんですけど、さすがに植ちゃん先輩じゃガサツ過ぎて……」

「ガサツなのは否定できない……まあいいや。じゃ、桐山には部長とかの仕事を教えるから他の子には練習を続けるように言っておいてね、新庄」

「わかりました」

少し作戦会議的なノリで互いの顔を見合った3人だが、すぐに植木が桐山を連れて退散。

新庄はもう1度竹内の様子を覗いた後、その場に残っていた部の仲間達に植木の指示を伝えた。



「物騒な世の中よね」

「ええ、木村先輩が本当に失踪したのでしたら」

植木の呟きに意味深な言葉で返した桐山に、彼女は眉をひそめる。弓道場の入り口から入ってすぐ横にある扉の先の部室で、書類などに目を通していた作業が中断した。

「何よ、その”俺事情知ってんだぜ”的な言い方は」

「神に誓って事情や真実は一切知りませんよ。ただ、先輩の性格とかを考えると自分から消えてしまうのには違和感が残る気がするんです」

というところ？ と植木はそのまま興味を示して桐山に続けるよう促した。

「木村先輩は確かに実力があって、勝負に関しては勝敗にこだわる典型的なスポーツマンタイプです。ですから当然負ければ激しく動揺しますし、悔しいとも思うでしょう。それに先輩は真面目な人です。物毎に関して途中で投げ出すようなマネはしないはず」

「マーサがそんな性格だったのはわかるさ。まさかそれを理由に途中で放り出すように消えるのはおかしい、とでも言う気？」

「いえ、ちょっと違いますね。重要なのは『投げ出さない』ではなく『勝敗にこだわる』方です」

彼の眼差しがさらに鋭さを増す。
それにつられるかのように植木も真面目な表情で彼を見た。

「プライドの高い木村先輩が『負けたまま』消えるはずが無いんです」

「でも高校の公式戦はもうないよ？」

「一般や大学と言う選択肢もあります。すぐに再戦するとは思いませんし普通しませんからね」

そこで桐山はようやく口を閉じた。

少し重い沈黙が2人を包むが、そこにギスギスしたような苦しさは無い。

「じゃあ桐山は……マーサが事件に巻き込まれた、と思ってんだね？」

「それもNOでしょうね」

「は？」

「だって最後に先輩がいたのって家の自室らしいじゃないですか。事件に巻き込まれるなんてないです。何かがおかしい」

「うーん……じゃあ悪魔が”異世界へ連れてってやるう”なんていつて連れてっちゃったのかもね」

「植ちゃん先輩……やっぱりバカですね」

植木は泣きながら弓道場から飛び出した。

.....

「竹内さん……落ち着いた？」

「ごめん、新庄君。私練習もしないで部活に来て……泣いてばかりで」

「いいよ、誰も迷惑だなんて思ってないし、道場はそこまで狭くないから」

この日の練習もあと1時間も無い頃になると、ようやく竹内の呼吸も落ち着いてきた。

それを見計らってか、新庄は彼女の横で立ったまま壁に背を預けて

小さく微笑む。

彼の言葉に、竹内は苦笑するしかなかった。

「面倒な相手にを好きになっちゃったみたいだね」

「う……やっぱりわかる？」

「いや、単純に俺がそういうのに敏感なだけだよ」

「そっか……（なんで、とか聞けないよね）」

微妙な間が2人の会話に割り込みながらも、新庄はゆっくりと竹内の内に秘めた言葉を絞り出す。

「木村先輩の……最後に竹内さんと帰る時の様子はどうだったか覚えてる？」

「うん。凄く疲れてたみたい。声とか小さかったし、私以外の人や景色を見る時の目が睨んでるみたいで……」

（試合後で疲労困憊なのはいい。けど、この子以外に対して睨む……？）

彼女は次々と正義との最後の下校を思い出していく。

些細ながらも早い足取り、いつもより多い舌打ち、それに関係無くいつも通りの彼女への態度。

それは八方美人が癖になっていた正義にとって、よほどの動揺だということを示している。

「今でも、さ」

「ん？」

「竹内さんは木村先輩の事、好き？」

「……………うん」

「探せるなら探したい？」

「うん」

「先輩が君を呆れるほど嫌ってても？」

「———え」

立ち直り始めていた竹内の表情が完全に凍った。

「言ったでしょ。俺、人の好意云々には敏感なんだよ」

「なに……言ってるの？」

「ちなみに弓道部で木村先輩に好かれてる人なんて誰もいない……：ううん、先輩はこの部どころかこの学校の生徒の皆を嫌ってる。鬱陶しいとさえ思ってるはずだ。先輩の俺達を見る目で分かる。人受けの良い笑顔の中で、ただ目だけが正直に俺達を侮蔑してるんだよ」

新庄だって、今の竹内にこの確信したと言ってもいいほどの推測を言いたくは無かった。

だが、現実問題として本人がいなくなったと校内に広まり始めている。その状況のせいか木村正義に対する悪評が生徒間で蔓延し始めている。

陰口、事実無根な言いがかり、過度な批判や人格否定など彼を心から好いている人物達が耳にすれば心を痛めてしまうであろう噂。

純粋な人格を持つ竹内のことだ。それを聞けば平静ではいられない。だからその耐性を付けるべく、新庄は彼女にとっての悪となることを決めた。

事実、すでに竹内は立ち上がり新庄からじわじわと離れ始めている。

「新庄君……なんでそんな酷い事言うの？」

「俺は事実を伝えているだけだよ。今後教室や廊下で周りに意識を向けてみると良い。耳を塞ぎたくなるはずだから」

「新庄君の馬鹿！！ どうして……正義先輩は、何も悪くないのに！！」

彼女は、耳を塞ぐかのように、都合の悪いことは自分から切り離すかのように、その場から脱兎の如く走り去った。

新庄への平手打ちと、他の部員を硬直させてしまうほどの悲鳴に似た大声と共に。

「新庄、お前……」

「いやあ、参った参った。まさか平手が飛んでくるとは」

騒ぎを聞きつけた桐山が新庄の下へと歩み寄る。

桐山は呆れたように、新庄は打たれた頬をさすりながら苦笑。

「竹内さんにとって木村先輩が『正義』なら、俺達は『悪』にならなきゃバランス悪いじゃん？」

「ま、なんにせよこれであいつはしばらく部活には来ない。ゆっくり考える時間ができるだろ」

その後桐山はパンパンと手を叩くと練習の終了と片付けを指示する。数分後、軽いミーティングなどを経てその日の部活は終了した。

「あー、人のいない道場って落ち着く」

「新庄……お前、どう思ってる？」

「どう、って……なにが？」

「言わなくてもお前ならわかるだろ。先輩の失踪についてだ」

すると新庄は大きく息を吐く。

「正直俺、あんまりあの人好きじゃないけど弓道部員としては尊敬してるよ。だからこそお前と同じく今回の先輩の失踪には疑問を抱くね」

「やっぱりそうだよばな」

「理由はたぶん桐山とは違うだろうけど。俺が思うに木村先輩は嫌いだったんじゃないかな、この世界が」

「は？ お前は植ちゃん先輩と似たようなことを言うんだな」

「あの人の考えそうなのは簡単に想像がつくけどそれとも違う。あれだよ、金魚が今自分がいる水槽を狭いと感じて水槽から飛び出そうとするのと同じことが言いたいんだ。先輩が生きてるかどうかは別として」

新庄の考察に黙るしか選択肢がなかった桐山はその場を後にするしかなかった。

彼の異常なまでの推測の的確さに驚きを超えて恐怖しながら。

「結局のところ、人間は与えられた世界という名の檻の中でしか生きられない生き物だ」

物音ひとつない不気味なほどの静寂に包まれた弓道場でただ一人新庄は微笑む。

「だからこそ、優れた者は皆檻にとどめておくことが叶わない。檻を脱した先に待つのは檻のない新世界か、秩序のないただの地獄か。かくいう俺はまだまだ檻の中の家畜だけれども」

冷めた空気を肺に通しながら自らの言葉に酔ったのか彼はそのまま笑いながらその場から立ち去る。

「にしても竹内さん……」正義先輩”か。釣り合わない想いを寄せることで運命がどう変わるんだろうね」

ガラリと扉を開けて外へ出た。

「早く次の仕事が欲しいよ、ナイン」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「――ッ!？」

おかしい夢を見た気がした。

それはつい数日前まで自分が日常だと信じていた世界の光景。

「新庄？」

不気味なほど冴えている自分の思考に先ほどの夢の内容を処理させる。

その間に辺りを見回すと見慣れない壁や家具、ソファなどが並んでいた。

「よう、起きた後の態度まで図々しいとはさすが魔王様だな」

「……ニユード、か」

「噴水の前でボロボロのまま倒れてたのを見つけたからファミユールを呼んで治癒を頼んでおいた。ここは俺の部屋で、そのベッドの本来の所有者は俺だ」

「それは、悪かった。もう平気だから退く。それとナインはどうしてる？」

するとやはりというべきか彼はさあ、と言うかのように両手を広げて首を振った。

起きたばかりで彼女のことを思い出すのは正直心苦しかったがそうも言っていられない。

せつかくニュードが目の前にいるのだから、やるべきことがある。

「今日の演説直前の助言、本当に助かった。改めて礼を言わせてくれ」

「よせよせ、あれは親切心なんて欠片もねえし単にお前を試しただけさ」

「試した？」

「おうよ。お前のスピリアの適性を見たかったのさ。俺の目に狂いなければありゃ『雷撃』だ。人間と比べると魔族のほうが適性のある奴が多いタイプだな。爵位だとか王だとよく見る」

自分は焰だと思っていた、なんて今更カミングアウトできないから黙っておく。

なぜかこいつに舐められた口調で話されることに少しずつムカムカしてきた。

「スピリアに関して私はもっと知りたい。もっと力が欲しいんだ」

「単刀直入に言えよ。俺は面倒なことは嫌いだからな」

「私はスピリアにおいてお前に師事したい」

ようやくニユードの表情が固まった。

彼のそんな表情にしてやったり、などと思った刹那、それは声を押し殺した笑い声へと変貌する。

「くっくくく……いいぜ、教えてやるよ。ただし基本的な事だけだ。具体的な戦術やら応用は教えないし、知りたきゃナインにでも頼め。あいつはスピリアに関して言えば最強中の最強だからな」

ナインの異常なまでの戦闘能力に関してはもう驚きはしない。

あの感じたことのない心臓を碎かれるかのような恐怖を忘れるはずがない。

「指南のほど、よろしく頼む」

「俺のため口直してほしかったら強くなれよ？ 魔王殿」

こうして、僕がさらに元の世界の人間から遠ざかっていく日々が始まるのだった。

第7話：小さき探究者たち（後書き）

正義の出番はちびつとでした。

ニユードはヘラヘラしてるけれども賢い人です。
単純に怠け者なんだな。

次回から待望の誠司側に突入します。

……誠司？ 誰それ。

とか言う方は2話を読み直しておきましょう。

正義とは違って爽やかな人物像になっていくと思います♪

では、次回もあとがきで会えることを祈りつつ。

第8話：賢王愚勇

「大きな誤差を生んだ今回の勇者召喚の儀ですが、大丈夫です。進行に問題はありません」

「しかしどうも納得できないね。前回の戦争からまだ10年と少ししか経っていないというのに、もう次の勇者を召喚しなければならぬとは。しかもこれではまるで、一方的にこちらに現れる人物を勇者扱いするようなものじゃないか」

とある大量の水が轟音と共に流れる広大な空間の中心、どこぞのパルテノンを思い出させるかのような造りの祭壇に2人の男女がいた。

「それが、私たち人間側の持つ勇者システムの基本。貴方も同じようにスカイルに現れ勇者を担ったではありませんか。我が王、シヨン様」

「どうにかしてこの戦いを強要するシステムを打破できないものかな……」

男性は白く足首まで隠れるほど長いローブに身を包んだメガネの白人。

優しく朗らかな印象を受ける顔立ちに加え、足の長い高身長かつスレンダーな体格をしている。

女性かというと、見た目は幼く、髪はフワツとしたボリューム感のある山吹色のセミロング。

その前髪の間から見える蒼い瞳は、どこまでも澄んでいると同時になんの感情も持ち合わせてなどいない。

白やピンクといった色をふんだんに盛り込んだ甘ロリのドレスを身に纏っていても、可愛らしさの欠片もなく、表情は眉ひとつ動く気配がないほど変化しない様子だ。

ちなみにそんな少女に不釣り合いながらも胸は立派な大きさを持っている、どこからどう見ても人間だった。

「今現在このスカイルが秩序を保っていられるのは、この勇者・魔王システムがあつてこそ。定期的に戦争を行うことで、人間とそうでないもの達との間に生じるいがみ合いに一定の歯止めをかけられているのです。我らが賢王ならばその程度ご存じのはず」

「もちろんさ。でもね、やはり人間である以上一瞬で自分が知覚する世界が反転してしまうと、割り切れない想いというのが出てくるのも事実だ。しかもこのシステムは、被召喚者が元の世界に戻れないというおまけ付きだからなおさらだ」

困ったような表情で、眼下に広がる神秘的な水の煌めきを眺めるシヨンと呼ばれた男性は唸る。

彼の瞳は細く開き、眩しそうにその光景を瞳に移しながら今度は静かに息を吸った。

「この世界に召喚された直後の私だって、気が狂いそうだったよ。ただ生きるのに必死な当時、『元の世界へ』っていうなんの面白みもない願いを抱き続けていた。きっと召喚されたこれまでの勇者たちも、そう思っていただろうね」

「私には、皆様のご苦勞を理解しかねます。元の世界ではただの人間だったのを、この世界に導かれることで、勇者として祭り上げられるのです。待遇としては何の問題もないかと」

するとションは再び困ったように息を吐く。

そしてポン、と隣にいた彼女の頭に手を乗せて、撫でると諭すように言葉を紡いでいく。

「それはスカイルに生きる君達の価値観だ。私ももうこの世界に生きて長いけれど、帰りたいという願いは変わっていない」

「今の生活がお気に召しませんか？」

「ああ、気に入らないね。勇者として召喚されて、戦争に勝って生き残ったから今度は国王か。押しつけがましいにもほどがある」

「すみません、とても言えばよろしいのでしょうか。この様な時に言うべき言葉を、私は持ち合わせておりませんことをお許しく下さい」

「いや、構わない。さあ……来るぞ。戦いの運命を押し付けられた哀れな勇者が」

2人の周囲に異様な光が発生し始めると、ションらは後退してその光景を見つめる。

揺れていた水が流れを成して、生きているかのように自在に動き始める。

多量の水が2本の水柱となって吹き上がり、螺旋を描くようにして絡み合う。

それらはすぐにより大きな1本の水柱となって2人の前へと伸びて足元に炸裂した。

「……………」

「……………哀れな」

黙る少女に対してショーンは独り言として彼を見た。

爆ぜた水柱が残したのは、1人の少年とわずかな荷物。

色が抜けたような明るい茶色の短髪にバランスの良い顔立ち。

半袖のシャツから伸びている両腕は適度に太く筋肉が男らしさをより強調していた。

「ようこそ、救いのない争乱の世スカイルへ……まあ聞こえてないだろうけれどね」

ショーンは彼を担ぎ、荷物を横の少女に持たせてその場を後にした。

……………

「失礼します、ショーン様!!」

「言わなくてもその顔を見ればわかるよ、レグナ君。彼が目覚めたんだね」

とある煌びやかな装飾が施された書斎に、一人の男性が飛び込んできた。

彼の報告を手で制したショーンは悠々と立ち上がり彼の前に立つ。

「で、状況は？」

「それが、監視と護衛の兵達が皆なぎ倒されまして……」

シヨーンは耳を疑った。

彼の眠る部屋にはシヨーン自ら近衛隊の精鋭を抜粋して配置させたのだ。

それを破って暴れている、などと聞いて驚かないわけがない。

思わずえ、と言ってしまったことも忘れて彼は走り出した。

「レグナ君、もしもの時は多少強引にでもお願いしますよ」

「承知しております」



2人が現場に到着した時には、すでに決着がついていた。

「放せ！！　ここはどこだ、お前らなんなんだよ！？」

相当興奮しているのか少年を後ろから羽交い絞めに行っている男性を振り払おうとまだ暴れている。

それでも押さえつけていた男性はビクともしないでただシヨーンを見つめる。

「シヨーン、この坊主はどうした。拾ってきたのか？」

「誰が坊主だ、おっさん!!」

低く野太い声で少年を不思議そうに見る男性にシヨーンは微笑んだ。

「いえいえ、昨晚召喚の儀を執り行うと言っておいたでしょう？」

「おい、まさか」

「ええ、彼こそ今回の戦争……《ヴォーグ》において我らの先頭を行くであろう勇者です」

その場の空気が凍った。

あくまで笑顔を崩さないシヨーンの隣、レグナや正面の男性、周囲の侍女や護衛までもが黙る。

いや、正確に言えば少年を凝視していたことで言葉が何もでなかったのだ。

その沈黙のおかげかどうかは知らないが、ようやく落ち着きを取り戻したように見える少年は顔を歪める。

「勇者って……俺が？」

「君以外に誰がいるんです？」

間髪入れず返ってくる答えに少年は苦い顔をした。

シヨーンは過去の自分を見ているようで胸が締め付けられる思いを抱いていたが言葉にはしない。

何もわからない、教えられていないこの場でああだ、こうだと言わ

れる事こそ最も辛いのだと知っていたから。

「とりあえず私の部屋に来るといい。ジョー、彼を降ろして私の後ろからついて来てくれるかい？」

「おう、任せな」

ニカッと笑ったジョーと呼ばれる男性は少年を降ろして背中を押す。状況に流されるまま部屋を後にするジョーんについていく少年の表情は、怒りと困惑に満ちていた。



客間から移動して10分ほど経ち、彼らはジョーんの書斎に集合していた。

部屋の中央に向かい合って置かれているソファに腰を下ろして互いの顔を見ている。

「私はスカイルと呼ばれるこの世界のガナード国という人間の住む国の王をしているジョーんだ。ジョーん・ウイル・ヒイラギさ」

「終って……日系なんですか？」

目の前にいるジョーんが王という立場にいる人物だと知った少年は彼を凝視しながら敬語で訊ねる。

そんな少年の問いにジョーんは頷き、さらに続ける。

「そう。母が日本人、父がイギリス人でね。そして、10年前に君と同じくこの世界に召喚された元勇者だ」

「え——」

「だから君が突然この世界に飛ばされて混乱する気持ちもわかるし、君の意思をなるべく尊重したいつもりでいる。君の名前を教えてほしい」

ショーンの声は変わらず優しく、そして心地よく鼓膜を揺さぶる。周囲の人間のことは後回しにして、少年はショーンの目を見た。

「俺は……誠司。小木塚誠司です。あの……ここが違う世界なら、俺を帰してくれませんか、お願いします!!」

名乗った少年……誠司は、ショーンに深く頭を下げる。

今の誠司の頭の中は、ようやく想いを打ち明けられたのに泣かせてしまった想い人、悠木香織のことで頭がいっぱいだ。

だから彼は説明など全てを差し置いて真っ先に彼女の元へと帰りたい、という意味をショーンに伝える。

だが、悲しいことにショーンは首を横に振らなければならなかった。

「本当にすまない。私もそうだがスカイルに召喚されてしまったら最後、元の世界に戻る方法は無いんだ」

「嘘でしょう!?!」

「今もなおどうにかして帰れないかと方法を探し続けてはいますが、

成果はありません。それに、召喚に関しては我々の意思すら関係なく自動的に発動してしまうのです。ですから、どうか――」

「ふざけんな!!」

バン、と机を叩き付ける音が部屋に響く。

これにはさすがにションも驚いた。

「俺には俺の生活があるんだ、勝手に介入されてたまるか!! 俺の用で俺を拉致したのかは知らねえけど、ここに長居するつもりは無い。帰る方法がないから諦めろ、なんて理由にならねえんだよ!!」

「……返す言葉もありません」

「頭下げてりゃ許されるとでも思ってたのか!? 日本人舐めてんじゃねえぞ、オイ!!」

そろそろ周囲の人間が彼の異質性に気付き始めた。これ以上は危険だ、と判断したレグナは思わず帯剣の柄に手をかけたが、抜く必要はなかったことを知る。

「そこまでにしときな、坊主。怒りの矛先をションに向けるのは筋違いだってことぐらいわかってんだろ？」

「――っ」

誠司の横に腰かけていたジョーが彼を手と視線で制したのだ。我を忘れて目を血走らせていた誠司が、途端におとなしくなり己の両手を見て愕然とする。

「また、やっちゃった……」

彼の両手は机を殴りすぎたのか出血と打撲で見苦しい色になっていた。

それを見ながら誠司は震えた声で小さく呟いたのをジョーをはじめレグナもショーンも聞き逃さなかった。

（彼のスピリアは、どうやらほぼ決まっているみたいですね）

正義のいる魔族の間とは異なり、スピリアを”己の内面を形作ったもの”と考えている人間からしてみれば、今の一瞬で誠司が持つ特性を理解するのはたやすいことだった。

とにかく、ショーンは元の世界への帰還などに関する話題は避けて今後に関して説明することにした。

彼に対する精神的ケアも重要ではあるが、それ以上に重要な事がある。

「誠司君……だったかな。君は何か武道の心得はあるかい？」

「……剣道と柔道ぐらいです」

付き人の侍女に両手を手当てされながら誠司は問われたことに関して素直に答える。

その声に先ほどのまでの威勢は無く、ただ諦めてうなだれるような印象だけを周囲に与えていた。

ジョーやレグナは『ケンドー』や『ジュウドー』と聞きなれない言葉に耳にして顔をしかめる。

そんな中ションは安心して息を吐くと同時に肩を落とした。

「なるほどね。でだ……実に頼みにくいことなのだけれど、聞いてくれるかな？」

「元の世界に、香織の所に戻れないなら……俺に拒否権なんてないじゃないですか」

コロコロと変化する誠司の様子に若干の気味悪さを感じながらレグナやジョーは会話を見守る。

その部屋の中は、異様な緊張感に包まれていた。

「じゃあ遠慮なく言うよ。この世界では魔王と勇者が出揃ったら互いに宣戦を布告しなければならないんだ」

誠司が息をのむのがわかる。

落ち着かない様子で動かしていた指や、唇を舐める動きも完全に止まっていた。

「宣戦を布告って……戦争をするんですか!？」

「ああ。互いに一定の領地と各貿易の優先権、そして国民を賭けて、ね」

このスカイルと言う世界での戦争は《ヴォーグ》呼ばれ、期間限定の戦いを行うシステムを持つ。

《ヴォーグ》期間中は世界のあちこちで戦闘が発生し、各地で甚大な被害が出る。

この戦闘期間の間に発生した両国の被害を金額に換算して最終的に被害が大きかったほうが勝利、という規定だ。

ただし、勇者と魔王のいずれかが期間内に死亡した場合戦争はそこで打ち切られる。

大抵はどちらかが死亡することで決着するのだが、極稀に長期化するらしい。

「ちなみに、前回の大战は私たち人間側の勝利だったよ。相手の魔王が無能だったからか早々に決着が着いたんだ」

「んで、大战を生き抜いた勇者ショーンはそのまま王位を継承して今に至るってわけだ、坊主」

寂しげな表情で語るショーンに続いて頬付きしながら付け加えるジョー。

そんな簡単な説明を受けて、誠司の動揺はさらに大きくなった。

「俺に人殺しをしろ、って言いたいんですか」

「正確には相手は人間ではないよ。まあ終戦までの過程で人間が相手になってしまう状況が全く無い、とも言いきれないが」

「それでも相手だって生きてる、俺たち人間と同じ生命だ!!」

今となっては、その場にいた一同にとって誠司の正論が眩しい。

もうどこにも戻れないほど、自らが生きるために多くの生命を奪ってきた彼らにとって誠司の言葉が胸に突き刺さり良心が痛むからだ。

それでも、勇者である誠司を説得しなければ話が進まないのも事実。

「誠司君、君の言う通りだ。確かに相手の生命を奪うのに変わりはないね」

「ならどうして!!」

だからシヨーンは非難されるとわかっていて頭を下げた。

「正論を振りかざす君ならわかるんじゃないかな。私も元勇者だ、君と同じ考えを持って、私の前の王に君と同じことを言った。そして、その時私が言われたことを君にも伝えよう」

「え？」

「私はもう、『勇者』ではないんだ。自分だけでなく、国民の生命を預かる『王』なんだよ。だから、1より全を護らなければならないんだ」

今度は誠司が何も言えなくなった。

シヨーンもできればこの言葉を言いたくはなかった。

なぜならこれを言ってしまうえば、たとえ正論だとされる勇者の言葉も、1人のエゴになってしまうから。

集団を統べる王の立場からしてみれば1人の意見だけを通すことなど許されない。

護るために戦わなくてはならないなら、戦いを拒絶することは王としての責務を放棄することと同じ。

そして軍を代表する存在の勇者が戦いを否定するのは、民を敵に売
るのと同じだった。

「本当にすまない、こんな卑怯な言い方しかできない王で」

誠司は固く拳を握った。

彼自身、この世界で戦いを拒むことが自分のエゴだとわかっていた。
同じように、それが彼にできる最後の抵抗と意地だということもシ
ョーンにはわかっていた。

だから、誠司は折れた。

「わかりました……………でも、俺は絶対に人間は殺しませんから」

『人間』は絶対に殺さない、という条件付きで。

「本当に……………ありがとう、誠司君。私たちは全力で君をサポートす
ることを約束しよう」

ショーンの方針に、その場にいた者で嫌な顔をする者は誰もいなか
った。

第8話：賢王愚勇（後書き）

さてさて、遂に始まった誠司側ですが、どうでしたか。

書いてるうちにションがメインみたいになってたような気もするけど気にしない。

はじめはそんなものだ、と信じたい。

今後数話分誠司側が続き、その後ようやく2人が出揃うことになるでしょう。

そこから私の本気です。↑え

私に【ダークシリアスに定評のある】が付くことを夢見て今後も頑張ります。

それでは、次回も会えることを祈りつつ。

第9話：鬼神開眼

「どうしてこんな状況になるんだ……」

トホホ、とでも言いたげな落胆を見せる誠司は、しぶしぶ剣を構える。

これまで扱ってきた竹刀よりも重い両刃の西洋剣は、慣れないからか刀身がぶれる。

「君は我らがナード騎士団を代表する勇者なんだ。その立場上、君の実力を団員達に見せておかなくては君の立場というものが危うくなるんだぞ？」

「知らねえって、そんなこと。とっとと始めて終わらせようぜ。重たくていけねえよ、西洋剣は」

「わかった。本気で頼むぞ？」

「安心しろ。どんな状況であれ勝負事なら手は抜かないって自分の中で決めてるから」

彼がこんな状況になったのには色々な原因があるのだが、それはおよそ2時間前に遡る。

.....

「ふあああ……」

「おはようございます、勇者様」

小木塚誠司はガナード国随一の規模を誇る巨大な城の、とある一室のベッドの上で目が覚めた。

「ん………」

「……………」

そして、誠司は起きたはずなのに視界が一瞬ブラックアウトしそうになった。

「誰だ、お前」

「ラファ・スン」

「嘘つけえ!!」

「失礼しました、ミク・ベンジョンソンです」

「お、おう……（嘘臭えな）」

「嘘です」

「あ、やっぱ？」

「嘘です」

「どっちだよ!？」

誠司の眠っていたベッドの横には1人の少女が立っていた。

山吹色のフワツとしたセミロングの髪に、顔を隠してしまうような前髪の間から見える蒼い瞳。

冷めた感情のない表情とは一転、身に纏っている甘ロリの可愛らしい服装がより彼女の異質さを際立てる。

身長は低く外見上幼く見えるが女性としての部位は立派に育っていた。

そんな少女としばらく無言で見つめあった後、誠司はもう一度深呼吸する。

「お前、誰だ」

「ですから、ミク・ベンジョンソンです」

マジか、と思わず口からこぼれてしまいそうになるのを何とか堪えて彼女を凝視する。

誠司のその視線に何かを感じ取ったのか自称ミク・ベンジョンソンは顔をそむけた。

「ん、どうした？」

「勇者様は、私に興味がおありなのですか？」

「うーん……興味があるかないかで言えばあると思うけど」

すると彼女は頬を赤らめて両手を広げた。

「どうぞ。まだ1日が始まったばかりですが、私の身体を如何様にでもお使いください。覚悟は……できていますので」

太ももをこすり合わせる仕草は、見ている者に一瞬で恥らっているのだと気付かせるほど。

そして彼女の言っている意味を理解した瞬間、誠司の興味は完全に霧散した。

「お前、自意識過剰過ぎ。俺の興味はそういう意味じゃないから、とりあえずションさんの所に……」

「いいえ、本日勇者様には別の方にご指導を受けて頂きたいと思えます」

ミク本人もジョークでやっていたのか、さっさと表情を元に戻すと数歩下がって会釈した。

そして誠司に対し用意していた服を差し出すと、着替え終わったら呼んでください、と言い残して部屋を出た。

1人になった誠司は改めてため息をつく。

「香織……」

このスカイルと言う世界に来てあっという間に一夜明けてしまった。頭に浮かんでくるのはあまりにも酷い別れ方をしてしまった大事な

幼馴染のこと。

「またもや死にたくなるような後悔や罪悪感に襲われながらも、振り払うかのように首を横に振ると置かれていた服に手を伸ばす。」

「お、なんか高校の制服に近いデザインだ」

「実はもっと煌びやかでデレーン、といった感じの服をイメージしていた彼にとって、その服はありがたかった。」

「どのような見た目なのか、と聞かれれば、一言でいえば学ランタイプの学生服とYシャツ。」

「ただし本物の学ランよりも生地は薄く、軽い。」

「袖口や肩、襟などには金や赤といった派手な色で刺繍に似た装飾が施されていて、上衣の内側には何かを挿しておけるようなホルダーがいくつか用意されていた。」

「すげえな、見た目学ランなのに軽くて丈夫か。どうやって用意したんだ？」

「呟いては見るが説明を求めるつもりのない誠司。」

「彼はさっさとシャツに袖を通してズボンを履き、上着を羽織った。」

「しかも意外に動きやすいぞ、これ……全然窮屈じゃないし」

「当然です。ショーン様が勇者様の元いた国の文化をご存じだったからこそ実現したのですから」

「へえ……って、おい！？ なんでもうここにいるんだよ」

「着替えを見ましたから」

「お前、異性の着替えなんて普通覗かないだろ」

「褒められました、てへ☆」

「褒めてねえし」

可愛らしいセリフに不相応な無表情が怖い、とはあえて言わず誠司は廊下へと移動する。

「どちらへ？」

「行くんだろ、今日俺に指導してくれるってやつ所に。案内頼むよ」

かしこまりました、と答えたミクは誠司の手を掴んで移動し始めた。なぜ手をつなぐ、など案内してもらおう身としては言いにくいのか誠司はおとなしく従うしかなかった。



誠司が連れてこられたのは、部屋を出て廊下を延々と歩き辿り着いた城の広い中庭。

ただし、普通感覚でいう中庭ではない。

端から端まで見渡せば人が米粒に見えるのではないか、と思うほど距離のある敷地だった。

そんな広い庭は、丁寧に保たれた植木や噴水の並ぶ美しい光景。

庭の半分には大勢の男性らと実に物騒な物が並べられている空間が広がっていた。

「なんだ、あれ」

「我がガナード国の防衛騎士団の稽古場です。従軍している人間ならば基本的に出入りも使用も自由になっており、常に己を磨く兵士達が剣を振っています」

へえ、と感嘆を漏らしているとミクは誠司の手を引いて稽古場へと向かい始める。

するとすぐに連中はミクに気が付いたのか剣を鞘に納めて敬礼した。

「おはようございます、ベンジョンソン前頭指揮官殿!!」

「固い態度、嫌い」

集団を代表して彼女にあいさつしたのは、昨日誠司の近くにいた騎士レグナだった。

誠司とそう変わらない身長に、哀愁漂う深い感情を見せてくる青い瞳。

茶色く少し伸びた細く綺麗な髪をうなじの辺りで1本に束ねていて、少し白めの肌に左目の泣きホクロがある中性的な顔立ちの男性だった。

「そういわないでくれ、一応立場ってもんがあるんだし」

「ジェイルは？」

「いつも通りション様直々の任務でここにはしばらく来てないよ。」

頼んだ通り彼を連れてきてくれたんだね、助かる」

「大した仕事じゃないから、気にしないで」

つかの間の談笑の後、レグナは改めて誠司の前に立った。

「改めて自己紹介をしようか。私はガナード国防衛騎士団で副団長を務めているレグナ・ジーニー、28歳だ。戦闘における君への指導は私が行う。まあ戦闘だけじゃなく人間としても、互いに磨きあっていける関係を築けるよう頑張ろう」

サツと言い終えた後、思い出したかのようにあ、という表情を見せた。

「それと昨日は実に不愉快な思いをさせてすまなかった。皆、王を守るためだったのだ。許してほしい」

そのあまりにも出来上がっていた見事な騎士っぷりに思わず喉を鳴らす誠司。

だが、その礼儀正しさや自らの非を認め謝罪する潔さには胸を打たれたようだ。

「いや、俺の方こそ結構な数の兵士さん殴ったし……謝るのはどちらかといえば俺だ」

するとレグナは人懐っこい笑顔で微笑んだ。

「それじゃあ今回はおあいこだ」

「そうだな。俺は小木塚誠司。指導の方、よろしくお願いします」

「ははは、敬語でなくても構わないよ。君とは対等な関係でいたいからね」

「あ……はは、ありがとな。レグナさん」

2人は互いに笑顔で固い握手を交わした。

ただ、その周りでは状況を把握できていない兵士たちが不思議そうな顔で彼らを見ている。

それに気付いた……いや、思い出したレグナは握手を終えると剣を納めた鞘の先で中庭に敷き詰められた敷石を叩く。

「皆静まれ。この青年は昨夜このスカイルに召喚されたショーン様に続く勇者である」

「誠司への無礼は、ショーン様への無礼と同意」

爽やかな印象を与える同年代の男性と比べるとやや高い声はよく通る。

それに続くようにしてミクも淡々とした表情でとんでもないことを口にした。

「俺、そんなに偉いのか」

「違う。ただ一般的に勇者は王自らが召喚しているってことになっているから尊厳を保つため」

「しかし戦場で我らの先頭に行くのは事実。そして誠司君、君は常に兵達の注目の的でなければならぬ。その思いが憧れだろうが目標だろうが、嫉妬だろうがね」

なるほど、と頷く誠司にレグナは1本の西洋剣を渡す。
鞘に収まっていたまま渡されたからか両手でもってもずっしりと重く、気を抜けば体がふらつく。

「なんだよ」

「皆の注目を集めるには、実力を見せるのが一番手っ取り早いだろう？ 実際に見れば後は口コミで噂が広がってくれるさ」

「マジかよ……しかも両刃で本物じゃないか」

「当然だ。本物を振らなければ実戦では扱えないからな」



そして冒頭に戻る。

腰に剣を下げて2メートルほど離れた位置に立ち向かい合う両者。

ミクを含んだ兵士たちは安全のためか2人とはだいぶ距離を置き、しかし見損ねない位置にうまく陣取ってその試合を見届ける準備をしていた。

ミクは相変わらず無表情のまま2人を見つめて動かない。

「それでは副団長、勇者殿、よろしいですか」

「私はいつでもかまわないよ」

「戦い方は何でもありでいいのか？」

「ああ。君のやりやすいようにやってくれ。ただし武器の変更は無しだ。それは騎士団支給の物だからね」

りょーかい、とだけ答えた誠司は慣れない柄と剣の重さ、長さに間合いを測りかねていた。

正直に言えば、誠司はレグナに軽くあしらわれて終わる、と自覚している。

相手は騎士団の副団長だ。対する自分はただの高校生。

良い勝負さえ望めない、と思いながらもとにかく全力で失礼の無いように、という意識も用意する。

「それでは両者構えて」

チャキ、と互いに剣の刀身と鞘がこすれる音を出す。

「はじめ!!」

それは一瞬の出来事だった。

審判の合図と同時にレグナは地を蹴り正面から距離を詰めてきたのだ。

見えない。

誠司の感じたことは本当にただそれだけだった。

「はあっ!!」

レグナの声が聞こえ、下からの抜刀と共に繰り出される斬撃が確実にこちらの右半身を捉えた。

死ぬ。

そう直感し、恐怖に頭が真っ白になっていく気がする。
その刹那、世界のスローモーションのように見えた。

ゆっくりと近づいてくる、支給品とは少し異なる形状を持った西洋剣。

磨き上げられた美しい刀身に一瞬自分の顔が映ったように見えた誠司はハッと我に返る。

（俺、笑ってるのか——）

映っていた自分は、ギンギンに腫れた眼をレグナに向け笑っていたように見えたのだ。

それだけではない。

死の恐怖を塗りつぶすほど脳内を支配していた『帰りたい』や『香

織に会いたい』という想い。
それが彼に動く力を与えた。

「何っ!？」

「くっ」

キンッ、と高い音を鳴らしてレグナの斬撃は支給剣の鞘が止めた。
おお、と周囲の兵が感嘆を漏らす、誠司には聞こえていない。

この一撃で仕留める計画が狂ったのか、一度距離を置くレグナは剣の先を誠司に向け構える。

そして誠司のとっさの動きに見事、と素直な賞賛を述べた。

「今の一撃を防ぐとは、見事です」

「手、抜いただろ」

「は？」

誠司はまだ剣を鞘から抜いていない。

そして、それを持つ手は極度に震えていた。

「俺は本気でやるのに、峰打ちを狙うなんて、レグナさんは手を抜いたんだよな」

ギリギリと奥歯がこすれる音が微かにレグナの耳に届く。

「それについて気を悪くしたのなら申し訳ない。ですが、少なくとも加速、狙い目などは本気でしたよ」

「足りないんだよ」

徐々にレグナの表情が険しくなる。

「誠司……君？」

「屈辱ですよ、レグナさん」

剣を抜き、刀身を振り上げ上段の構えをとる誠司。

足、胴が無防備となるその構えにレグナだけでなく見ていた全員が絶句した。

「男なら、剣士なら、常に正々堂々、全力で戦うのが礼儀じゃないんですか」

誠司の目は、冷え切っていた。

言葉を返そうとレグナが息を吸ったその瞬間。

「やあああああああああああああああああ！！」

レグナさえ怯ませるほどの声量で誠司が気合を放出し前へ出た。

その一瞬が全ての思惑を白紙に戻し、誠司の抱いた憤怒が上塗りされ塗りつぶされる。

「ふんっ!!」

「あぐっ——」

上から振り下ろされた一撃にレグナは耐え切れず、防御のため横にした刀身を両手で押さえる。

豹変した誠司の様子に混乱しながらもレグナは冷静に彼を観察した。

（なんて誇りの高い少年なんだ）

自分にはない、『正々堂々』と『対等』への強烈な執着。

そして長く見ていられないほど真っ直ぐに『自分』を伝えてくる力強い瞳。

（だが、その誇りを彼自身扱いきれてないのかもしれない）

右わき腹、左肩、と次々に繰り出される強烈な一撃。

扱っているのは真正正銘、本物の剣。

これ以上手を抜くことは誠司に対して無礼であり、自らの生存率を下げる行いでしかなかった。

「誠司君、本気でいくよ!!」

「あたりまえ、だ!!」

一度誠司が繰り出した斬撃を大きな動きで力いっぱい横に反らすと、剣を握りなおすレグナ。

大きく一步踏み込んだ彼は低い位置から斬り上げてしまおうとしたが、彼の前まで来たときにはすでに気付くのが遅く、カウンターとして飛んできた膝蹴りに直撃した。

「ブッ——!？」

思い切りのけぞったレグナを確認すると、誠司は剣を捨てて彼の胸元と左袖を掴む。

右足をレグナの右足の前に出して袖を引っ張り、右手で掴んだ胸元を横に押すと簡単に彼は地面に倒れた。

その後当然のような動きで、右脇で首を絞め左脇でレグナの腕を固定した誠司は宣言する。

「俺の、勝ちだ」

レグナはただ茫然と、誠司が使った未知の体術に呆けているしかなかった。

『柔道』を知らないレグナからしてみれば、自分が『支釣込足』という技に掛けられたこともわからない。

顔を強打し一瞬混乱したためか、誠司に向き直って接近し直したところを掴まれて足をかけられたのだ。

知らないことに気付かないのは仕方のないことだが、柔道経験者からしてみればみつともない負け方である。

ちなみに抑えに使ったのは『袈裟固』という抑込技。

「見事だ……誠司君」

解放されてもしばらく大の字で仰向けになっていたレグナが、ようやく落ち着いたのか、そう呟いた。

近距離で今の手合せを目撃した兵士たちはあまりの興奮に湧いた。

初めて見た新たな勇者。そんな勇者が見せた新たな体術。そして内に秘めた凶暴性。

そのどれもが刺激的だったのか、誠司への注目度がうなぎ上りになっていた。

「誠司」

「……………」

「誠司」

「……………」

「誠司!!」

「はいっ!?!」

ミクに怒鳴られるまで放心していた誠司は、横に倒れているレグナを見る。

彼との手合せが、自分の勝利で終わったことを実感すると震えている両手を見てまた怯え始めた。

「くっそお。俺、また頭に血が上ったのか……………」

ミクもレグナも、その眩きだけは聞き漏らすことなく記憶した。

第9話：鬼神開眼（後書き）

さて、今回名前が出たショーンの側近の少女。

彼女は今後もクールにボケを担当する予定ですので、お楽しみに。

そして久々となる戦闘に近い状況の描写。

まだ戦闘が少ないのは、後半嫌と言うほど戦闘を用意しますので勘弁してください。

今回はまた少し誠司の性格が露わになったのではないか、と思います。

それではまた次回のあとがきでお会いできることを祈りつつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0454x/>

隣界のユートピア-looking for the true justice-

2011年11月8日17時04分発行